

---

**SPEC ~ 警視庁公安部公安第五課 未詳事件特別対策係事件簿 ~ 呪われし痣**

海東

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SPEC（警視庁公安部公安第五課 未詳事件特別対策係事件簿）  
呪われし痣

### 【Nコード】

N8051P

### 【作者名】

海東

### 【あらすじ】

これはTBSで放映されたドラマ「SPEC（警視庁公安部公安第五課 未詳事件特別対策係事件簿）」と18禁ゲームの「るいは智を呼ぶ」とのクロスオーバー小説です。

ある日、未詳事件特別対策係通称『ミシヨウ』に1人の男が訪れ、その男から三宅という男の自殺について調べて欲しいとの依頼を受ける。

三宅という男は死の直前まで“呪い”について調べていたという。

捜査を開始した当麻と瀬文は、その中で6人の少女たちと出会う。  
こうして『ミシヨウ』は“呪い”、そして少女たちの運命と向き合  
うことになる。

## プロローグ

警視庁公安部公安第五課未詳事件特別対策係。  
通称『ミシヨウ』。

それは捜査一課が手に負えない特殊な事件を捜査する為、公安部により設立された。

「公安第五課未詳事件特別対策係にお客様です！」

室内に備えられた簡易エレベーターが動きを止めると、中から前髪を揃えた長い黒髪の少女が笑顔で言った。

「あゝ、雅ちゃん」

少女の声を聞いて、白髪の老人が歩み寄っていく。

彼はこの『ミシヨウ』の係長である野々村ノノムラ光太郎コウタロウであった。

野々村は既に定年を迎えているが、囑託としてここ『ミシヨウ』の係長に就任している。

雅ちゃんと呼んだ少女の側に立つとこっそりと耳打ちした。

「その……女房との離婚の件なんだけど」

「私、遅れてるんだ」

雅ちゃんは笑顔から突然、無表情に変わって冷たく言った。

「えっ！？な、何が!?!」

「さあ！それでは、張り切ってください!?!」

雅ちゃんは野々村の問いには答えず、再び笑顔になって声を上げた。彼女の後ろには背の低い中年の男が立っている。いかにも中小企業の間管理職みたいな面構えをしていた。

「あー……、あ！ど、どうぞどうぞ」

野々村は雅ちゃんの言葉に鉄パイプで殴られた様な衝撃を受けて惚けていたものの、

辛うじて本来の業務を思い出し、中年の男をすぐ側のソファへと案内する。

男はソファへ腰掛けると、すぐに鞆から名刺入れを取り出した。

「あ、私はこうい者です」

「ほほう……、出版社の編集長をやっておられるのですか？」

野々村は男から名刺を受け取ると、それを懐にしまう。

男は「はい」と頷くと、ここへ来た理由について話し始めた。

「……その、実はですね、うちで働いていたミヤケヤスヒロ三宅康博っていう男がですね。その、つい先日自殺しましてね」

「ほう……自殺、ですか」

野々村もソファに腰掛けて男の話に相槌を打つ。

「はい。……それがただの自殺なら良かったのですが」

「ただの自殺ではない？」

「ええ、遺書も何も無いんです」

「突発的な自殺だったのでは？」

「いえ、三宅はうだつの上がない男でしたが誠実で真っ直ぐな奴

で、そんな急に死のうなんて思っつて自殺する様な男じゃありませんし、それに……」

男はハンカチを取り出して額の汗を拭った。

「実は、彼が最近調べていたものが……その」

「何なんですか？」

「“呪い”に関してだったんです」

「“呪い”！？」

野々村は思わず素っ頓狂な声を上げた。

その手のオカルト染みた話がここ『ミシヨウ』に来るのは初めてのことでない。

しかし、やはりその手の話は何度聞いても耳慣れるものではない。

何故ならここは『ミシヨウ』。

その手の事件を専門にし、野々村自身も何度か本物を目の当たりにしたことがあるからだ。

「この21世紀科学の時代に“呪い”なんてどんだけー！！」

「と、当麻君、何時の間に！？」

何時の間にか野々村の隣に左腕を三角巾で吊るしている女が座っていた。

彼女の名は当麻紗綾<sup>マスマヤ</sup>。

『ミシヨウ』に所属する刑事であった。

「“呪い”を調べて逆に“呪い殺される”って、何時の時代のホラーだよ！っていつかリングかよ！？」

馬鹿にした様な口調でソファにふんぞり返る。

こう見えても彼女は京都大学理学部卒でIQ201の天才なのだが、今の姿からはそれを想像するのは難しいだろう。

「お前はイチイチ余計な口を挟むな！」

机の上でまるで石像の様に佇んでいた坊主頭の男が当麻に向かって強く言った。

彼の名は瀬文セフミタケル焚流。

若くして警視庁特殊部隊（SIT）の隊長であったが、色々ワケがあつてここ『ミシヨウ』へ配属となつた。

瀬文に注意された当麻はまるで子供の様に口を尖らせる。

「えー？瀬文さんは“呪い”なんて信じるんですかー？」

「信じる信じないはこの際問題じゃねえ。問題なのはためえがいることで話が進まないことだ」

瀬文が睨み付けると、当麻はそのまま不満丸出しの顔で黙り込んだ。それを見て瀬文はフンと鼻を鳴らすと、野々村に目で「続きをどうぞ」と促した。

「あー、すみません。話が脱線してしまつて……。で、“呪い”でしたか？」

「は、はあ。……実は三宅は少し前に道端で知り合つた女学生に頼まれて仕事の合間に“呪い”について調べていたそうなんです」

「女学生……ですか」

野々村は雅ちゃんと初めて会つた時のことを回想していた。

一方、当麻はその言葉に妙な引つ掛かりを覚え、前傾姿勢で男に尋ねた。

「女学生に頼まれた……って、道端で知り合っただばかりの素性も知らない奴の頼みなんてよく聞こうと思いましたがね？」

「三宅は基本的人にお人よしでしたから……。それに、その女学生とも全く知らない仲では無かったみたいですし」

「つつーと？」

「いえ、彼女の連れの知り合いだったそうで」

「フーン」

当麻は唇をアヒルの様に尖らせて再びソファにふんぞり返った。

男は再びハンカチで額の汗を拭くと、話を続けた。

「三宅はその件に関して、割と真剣に取り組んでいたもので……。

それがあんな形で死体として発見されたら、その……」

「気になる……ということですね？」

「……はい」

「なるほど。分かりました。この事件、我々『ミシヨウ』に任せて下さい」

野々村は胸をポンと叩いた。

男は何度も頭を下げ、野々村にお礼を言う。

当麻は面倒臭そうにその様子を見ていたが、この事件が少し気になってもいたので、頭をボリボリと掻きながら立ち上がる。

瀬文もまた、すくつと立ち上がった。

こうして彼らはこの新たな事件へと足を踏み入れるのであった。

## 第1話A 『智ちゃん』

当麻たちは三宅の遺留品を確認していた。

三宅の遺体は既に粗方調べ終わっており、状況から見ても自殺の線が濃厚であった為か

そう時間の経たない内に遺留品は遺族の元へ返されることになっていた。

「ギリチョコセーフ！」

「下らねえこと言ってるんで、何か“呪い”に繋がるようなものでもあったのか？」

瀬文が苛立ちを隠さずに言った。

「今探してんだろーが！！少し待ってるハゲ！！」

当麻が返す刀で言うと、瀬文の鉄拳が後頭部へ飛んで来る。

「あだっ！！」

「いいから真面目に探せ」  
「チツ！！」

聞こえる様にわざと大きく舌打ちするが、瀬文は無視する。

当麻は遺留品の中から、まず手帳を手に取った。

そして、最初から最後のページまでパラパラめくるとすぐにそれを置く。

次に携帯電話を手に取った。

「えーと履歴履歴……」

当麻は携帯電話を操作し、着信履歴を調べ始めた。その中から『智ちゃん』という名前に注目する。

「こいつが噂の女学生だな」

「……？何で分かる？」

瀬文が後ろから携帯電話のディスプレイを覗き込みながら聞いた。当麻は振り返らずに、先程置いたメモ帳をもう片方の手で掴み、適当なページを開いてから瀬文に見せた。

「瀬文さん見て下さい、この手帳。一つの物事に対して律儀に関係者の名前、日付まで記入されています」

そう言うと、今度は別のページを開いた。

「ここに『智ちゃん』という名前と『調べもの』という言葉が最近の日付と一緒に書いてあります。あの編集長によると、女学生に調べものを頼まれたのはつい最近だそうです。詳細な日時は分かりませんが状況としては一致しています。それに……」

次に、当麻は携帯電話を操作して、ディスプレイに電話帳に登録された名前を表示させる。

「携帯電話だと、あの編集長とか、仕事の関係者の名前はフルネームで登録されています。逆にそれ以外の友人なんかは下の名前だけとか、ニックネームで登録されています。ニックネームで登録された人物の調べもの……つまり、仕事ではない調べものということになります。あの編集長はこう言っていましたよね？」

(……実は三宅は少し前に道端で知り合った女学生に頼まれて仕事の合間に“呪い”について調べていたそうなんです)

「っつーことで、仕事の合間に調べていたってことは仕事じゃないプライベートな調べもの。つまり、女学生から頼まれた調べものってことだよ。分かったかハゲ!？」

瀬文は無言で当麻の額をペチツと叩く。

「一言多いんだよ、お前は」

「いぢぢぢ……それと着信履歴を見ても、その『智ちゃん』からの一番古い着信は1週間とちよつと前くらいです。これらの材料から推測するに、調べものを依頼した女学生は『智ちゃん』の線が濃厚ってわけですよ」

「なるほどな。で、その『智ちゃん』は何処の誰なんだ？」

「取り敢えず掛けて見ましようか」

当麻は『智ちゃん』の番号へ発信した。

「!!馬鹿かてめえは!?!いきなり掛ける奴が何処にいる?」

瀬文は慌てて携帯電話を取り上げようとするが、当麻はひょいと交わした。

そして、瀬文に背を向けたまま言った。

「善は急げって言うじゃないですかー」

「常識つてものを考える、この非常識女!!!」

再び瀬文が飛び掛ろうとした時、電話が繋がる。

「あの……もしもし？」

電話の向こうから可愛らしい声が聞こえて来る。

この声の主が『智ちゃん』なのだろうか。

当麻は電話口に知性の欠片も無いがなり声で呼び掛けた。

「あー、もしもし『智ちゃん』さんですかー？」

「……？」

電話の向こうは明らかに困惑している。

瀬文は当麻の手から携帯電話を引っ手繰ると、当麻に向けて軽く舌打ちする。

そして、携帯電話を素早く耳に当て、馬鹿に丁寧な口調で答えた。

「……突然の電話、誠に申し訳ありません。我々は警察の者です」

「え？警察……ですか？」

突如電話を掛けて来た相手の正体を知って、電話の向こうの少女は軽く狼狽している様であった。

瀬文はコホンと軽く咳払いをする。

「本来であれば、然るべき手順を踏むところなのですが、多少手違いがありこんな突然に電話をしてみました次第であります」

「その、突然のことなのでこちらも少し混乱して……。警察の方が僕に何か用があるのでしょうか？」

「三宅康博さんの件でお電話させて頂きました」

「三宅さんの……？もしかして、三宅さんがお亡くなりになられた件、でしょうか？」

瀬文の言葉を聞き、電話の向こうの少女はようやく事情を飲み込ん

だ様であった。

声だけを聞くとまだあどけなさの残る感じであったが、その言葉には何処か成熟した知性を感じる。

携帯電話を奪おうとする当麻の手を交わしながら、瀬文は続けた。

「……先程も申し上げましたが、こちらの手違いにより被害者の電話から掛けてしまったので、そちらも非常に混乱していると思われます。また改めて連絡をさせて頂きたいのですがよろしかったでしょうか？」

「あ、はい。そうして下さると非常に助かります」

「つきましては、貴女が『智ちゃん』本人であるか確かめたいのでありますが……」

「あ、はい。恐らく『智ちゃん』は僕で間違いないと思います」

「そうですね。では、すみませんがまた後ほど」

瀬文はそう言った後に電話を切り、当麻の方へ向き直る。

「おい、てめえ。被害者の携帯電話から電話を掛ける刑事が何処にいるんだ？」

「ここにいますよう」

当麻はそう言つと舌を出しながら右手の人差し指を頬に当て、体を斜めにした。

そして、これ見よがしにウインクする。

瀬文はその顔に無表情で手刀を食らわした。

1時間後、改めて『智ちゃん』へ連絡すると、何とか会う約束を取り付けることに成功した。

2人は『智ちゃん』と会う約束をした場所へと向かうのであった。



第1話A 『智ちゃん』(後書き)

推理に穴がありまくりかもしりませんが、そこは温かい目で見て下さると助かります。

## 第1話B 『死者からの電話』

僕らはみんな、呪われている。  
みんな僕らに、呪われている。

そして、この世界は呪われている……。

「智……、あたしお腹空いたよお……」

「アハハハ、るいつたらー」

「何？あんたはまたそれなの？」

「るいセンパイはいつもそれですよね！」

「あ……私の家近所だから、家から何か持って来てあげましょうか？」

「おー、流石はおっぱいメガネ・イズ・オカン」

僕の名前は和久津智。

普段は南聡学園に通っているお嬢様をやっている。

そして、今使われていないビルの屋上で友人である少女たちと談笑している。

突然だが、僕には誰にも言えない秘密がある。

それは決してバレてはいけない秘密。

バレてしまえば、死に至ってしまう秘密。

それを僕らは“呪い”と呼んでいる。

僕の“呪い”は“本当の性別を知られてはいけないこと”。

そう、僕は本当は男の子なのだ。

かつて僕は“呪い”を踏み、死に掛けたことがあった。

その時の恐怖から、僕は自分の秘密を守ることにより一生懸命になった。その為に、出来るだけ人と深く付き合うことを避けてきた。

他人との距離感。

僕にとってそれは難題であった。

人を遠ざけること。

それはそんなに難しいことじゃない。

しかし、遠ざけ過ぎると今度はかえって敵を作ってしまう可能性がある。

人と近くなり過ぎててもいけない。

しかし、離れ過ぎててもいけない。

僕にとっての対人関係はいつもこの距離感をはかることであった。

でも、いつまでも孤高を気取ることなど出来やしない。

いつまでも孤独でいることに耐えるのは難しい。

それでも孤独でいなきゃいけない。

“呪い”があるのだから仕方ない。

そう思い込んで生きて来た。

それはある意味信仰に近かった。

だけど、あの日死んだ母さんから届いた一通の手紙。

それが僕の、僕らの運命を大きく変えた。

その手紙をきつかけに、僕は1人の少女と出会った。  
後で分かったことだが、彼女は僕と同じ“呪い”持ちであった。  
彼女との出会いが端を発してまた1人、また1人と“呪い”持ちは  
出会いを重ねていった。

こうして『僕』は『僕ら』となった。

「ううっ……お腹空いたあ……」

空腹に涙を流して苦しむ赤い髪の少女

ミナモト  
皆元るい。

「ったく、付き合ってらんないっての」

冷めた目で見下ろしながら、プラチナブロンドの髪を翻す少  
女 ハナグスクアトリ  
花城花鶏。

「る、るいセンパイ！ここにお菓子がありますよう！」

小さな体で精一杯るいを助けようとするピンクブロンドの髪の少女  
ナルタキ  
鳴滝こより。

「あ、でもあまり空腹との時に甘いもの食べると気持ち悪くな  
らないかしら？」

何処かイケてない発言をしてしまい、周りの空気を掻き乱す亜麻色  
の髪に眼鏡の少女 シラサマイコ  
白鞘伊代。

「空気読め、このメガネ巨乳」

人形のように無表情な顔で平然と毒を吐く、少し不思議な青い髪の少女  
カヤバアカネコ  
茅場茜子。

「アハハハ、伊代も相変わらねえだね」

そして、彼女たちの中で可憐に笑う黒髪の少女(?)  
ワケツトモ  
と和久津智。 僕、こ

僕らは群れだ。

この呪われた世界をやっつける為の。  
そして、この呪われた世界と一緒に生き抜いていく為の。

僕たちはいつもの溜まり場に来ていた。

他愛の無い会話。  
つまらないながらも楽しい会話。  
今もるいが何時もの様にお腹を空かせて、それを皆でからかっていた。

そんな中、ふと僕の携帯電話に着信が入る。  
「誰からだろう?」と携帯電話のディスプレイを見て、僕の顔は瞬時に凍りつく。

胸の鼓動が突然速くなり、血の気の引く音さえ聞こえてきそうだった。

そこに記された名前。

決して有り得ない名前。

三宅さん。

ある日、三宅さんは僕らの前に記者と名乗って現れた。

こよりの姉・鳴滝小夜里ナルタキサヨリから言伝を頼まれたらしい。

最初は勿論、彼の存在を訝しんだ。

どう見ても胡散臭いし、何より僕らは“呪い”という秘密を持っている以上、他人との接触には細心の注意を払わないといけないからだ。

しかし、いざ話してみると意外と気さくな人で、つついこちらも余計な話をしてしまうこともあった。

何時の間にか、僕は三宅さんと連絡先を交換していた。

そんな三宅さんは数日前に突然亡くなった。

自殺だと言う。

だが、僕はそれを信じることは出来なかった。

それは彼の死の直前、僕らがあることを頼んだからだ。

“呪い”について調べて欲しい。

「どうしたの？ トモチん？」

るいが心配そうな顔で僕の顔を覗き込んだ。

僕が携帯電話のディスプレイを見たまま固まっていたので不審に思ったのだろつ。

僕は慌ててるいに笑顔を向ける。

「……あ！ ううん。何でも無いよ！」

「?そう?じゃあ、いいけど」  
「.....」

茜子が訝しげな目で僕を見ている。

彼女には僕の動揺はバレてしまっているのだろう。

僕は取り敢えず平静を装って、電話に出ることにした。

少し怖いけど、それでも放って置くわけにもいかないから。

「もしもし.....?」

僕は電話の向こうへと呼び掛けた。

我ながら少し上ずった声になっていたのが、何となく恥ずかしい。

もしも、この電話の向こうから三宅さんの声が聞こえて来たら.....。

そう思うと、まるで心臓を氷の手で鷲掴みにされた気分だ。

何時の間にか喉がからからになり、唾を飲み込もうとして口の中が空回った。

すると、電話の向こうから反応が返って来た。

「あー、もしもし『智ちゃん』さんですかー?」

聞こえて来た声は、女性の声であった。

勿論、聞き覚えは無い。

死者からの電話に引き続き、謎の女性の声。

この予想だにしない展開にどう返したらいいのか、流石の僕でもすぐには浮かんで来ない。

「.....」

仕方無しに、相手の次の反応を伺う。

すると、何やら電話の向こうでバサツと物音がした。

「……突然の電話、誠に申し訳ありません。我々は警察の者です」

次に聞こえて来たのは、先程とは打って変わって真面目なトーンの男性の声であった。

その上、『警察の者』と名乗っている。

それで合点がいった。

警察が三宅さんの携帯電話から僕の携帯電話に直接掛けて来たのだ。死者からの電話、その正体は意外にあっけない。

しかし、ここでまた一つ新たな疑問が浮かび上がってくる。

警察が何故僕に？

三宅さんの死は世間一般では自殺、となっている筈である。

それは警察からの発表だから間違いない。

その警察がよりもよって三宅さんの携帯電話から何故掛けて来るのか？

そもそも、本当に警察からなのだろうか？

電話の向こうの男は馬鹿丁寧な言葉遣いで話した。

三宅さんの携帯電話から掛けて来たことは手違いであるということ。

三宅さんについて僕から聞きたいことがあるということ。

僕が『智ちゃん』と同一人物であるかということ。

警察と思われる人たちからの電話はその後「改めて連絡する」と告げて切れた。

その間、2分も経っていなかっただろうが、様々な思考が絡みついて、まるで1時間くらい話しているような錯覚を覚えていた。

僕はふうと一息つくくと、携帯電話を仕舞う。

「誰からの電話でありますか？ともセンパイ！」

こよりが興味津々な目で聞いてくる。

「ん。ちょっとね」

僕はそれだけ告げた。

警察から電話があった。

なんて言えば、余計な心配を掛けてしまうかも知れない。だが、こよりは僕の言葉を別の意味に捉えたらしい。急に頬を赤く染めた。

「も、もしかしてともセンパイの彼氏でありますか！？」

こよりの言葉に花鶏がいち早く反応する。

「何だつてー？私の智に手を出すのは何処のどいつだー？」

花鶏は僕の携帯電話を引つ手繰ろうと手を伸ばす。

しかし、その手は携帯電話ではなく、僕の胸へと伸ばされた。

「！！ひゃうん！？」

「智ちゃんは今という者がありながら、いけない子ね」

花鶏の細くしなやかな指が服の中へと侵入しようとする。

そう、花鶏はガチでそういう子なのだ。

「やあの、やあの、それやあの！！！」

「ああ！このAAAの胸！まさに究極の美！！」

目をハートマークにさせながら、うつとりした顔で手を伸ばす花鶏の背後にるいが回り込んだ。

「花鶏！！」

「ぐえっ！！」

その麗しい顔つきとはあまりにもかけ離れた呻き声を上げて花鶏は倒れる。

「大丈夫、トモ！？」

「うっつ……怖かったよお……」

「おーよしよし」

先程も言ったが、僕には“呪い”がある。

一歩間違えれば、その“呪い”を踏んでしまうだけに、花鶏のセクハラ行為は僕にとっては恐怖である。

……まあ、それは“呪い”とは関係なくともこよりや伊代にとっても恐怖ではあるのだが。

「……………」

何時の間にか不細工な猫ガキノドンを抱いている茜子が先程から僕をずっと見ている。

彼女が何を考えているのか、僕は未だによく分からない。

だが、彼女は僕が何を考えているのかを理解しているのである。

「あ、もうこんな時間だわ……」

伊代が時計を見て言った。

気付くと、辺り一面の夕焼け空にそろそろ闇が染まり始めた頃であった。

僕らはいそいそと解散した。

1時間後、再び先程の自称・警察の人から電話が掛かって来た。

僕は取り敢えずその自称・警察の人たちに1人で会うことにした。

## 第2話 『裏にいる者』

当麻と瀬文は待ち合わせに指定した場所で『智ちゃん』を待っていた。

改めて連絡をした際に相手の名前が和久津智ということ、そして学生であることを聞いた瀬文は、待ち合わせ時間を放課後に指定し、彼女もそれを快く了承した。

学校の前で待ち合わせした方が確実ではあったが、それは相手側に拒否された為、学校から離れた場所にあるスイーツの店の前で待ち合わせとなった。

「南聡学園って、お上品な校風で有名のあの南聡学園かよ。つかあゝ、つまり相当なお嬢様ってところですかね？」

「お前もそこへ編入して、10年くらい学んだらどうだ？」

「そりゃあ、確かに私は今でも学生としてやっていけるくらいの若さと美貌を持ち合わせていますけどおゝ」

「……それ以上喋るな。ニンニク臭で胸糞悪くなる」

そんな風に話していると、向こうから南聡学園の女子制服を着た長い髪の美しい少女が来るのが見えた。

少女は2人の前へ来ると足を止めて、頭を下げる。

「どうやらこの少女が『智ちゃん』ことと和久津智に間違いないようだ。」

背は女子学生としては平均身長より少し高いくらい。

服の上からでも分かるほど華奢な体つきで、スカートの下に見える足もほっそりとしている。

胸も真っ平らと言っていい程小さく見えた。

愛らしい顔つきながら、凜とした佇まいはまさにお嬢様といった感

じである。

瀬文は彼女へ向けて、ちょうど45度に体を折り曲げた。

「ご足労、有難く思う所存です。学生の貴重な時間をわざわざ我々の為に使用して頂き、感謝の言葉もありません」

「いえ、こちらこそ」

和久津智は再び頭を下げる。

「それで、僕は何をお話しすればよろしいのでしょうか？」

「『僕』!?!」

当麻は上着のポケットに右手を突っ込んだまま和久津智へと食って掛かった。

「女の子が自分を『僕』って、オメーは大山 ぶ代かよ!?!」

「はい!?!」

和久津智は目を丸くすると同時に瀬文がため息をつく。

「別に自分を何て呼んでもいいだろ。それに、大山の 代が『僕』って言うのは役の上だけだろーが」

「いちいちうるせーなーこのタコ! 大山のぶ ナメんなコラァ!」

「あ、あの!」

突如口論を始めた2人を見て、慌てて和久津智が止める。

「……今は未来の猫型ロボットの中の人について争ってる場合じゃないのでは?」

「……確かに。見苦しいところをお見せして申し訳ありません」

瀬文は申し訳なさそうに頭を下げた。

それを横目で見ながら当麻は右手の小指で耳をほじっている。

「……で、貴女に聞きたいのは電話でも伝えました通り三宅康博さんの件ですが、貴女が三宅康博さんに調査を依頼した件について聞かせて貰えますか？」

「僕が三宅さんに依頼した……」

和久津智はひと呼吸入れてから当麻の問いに答えた。

「……はい、確かに僕は三宅さんにあることについて調査を依頼しました」

「そのあることとは“呪い”について、ですよね？」

「……はい」

やや間があつてから和久津智は答えた。

そんな彼女の一拳一動を見逃さぬように見つめながら当麻は聴取を続ける。

「具体的にはどんな？」

和久津智は一瞬考える素振りを見せた後、今度はあまり間を開けずに答えた。

「よくある話ですよ。学校の怪談とか？不思議とかそういう感じの。

……あの、それが何か？」

「……」

「もしかして、僕疑われてるんですか？三宅さんを自殺に見せ掛け

て殺した。とか」

「いえ、決してそうでは」

突如押し黙った当麻の代わりに瀬文が答える。

「形式上の事情聴取という奴であります」

「でしたら、こちらにはこれ以上警察の方々にお伝え出来ることは無いと思いますよ？三宅さんと知り合ったのだから、ほんの数日前ですし」

「はあ」

「三宅さんが亡くなられたのは確かに残念だと思えます。でも、本当に悲しいことだけでも、それだけです。そこまで深い付き合いだったわけじゃありませんし、その依頼した調査……って言うところ少し大袈裟ですけど、それも結局デタラメっていうか、幽霊の正体見たり枯れ尾花！って感じてして」

そう言うと、和久津智は眉を八の字にしながら苦笑する。

「……分かりました」

当麻はその顔をじっと見つめた後、静かな口調で言った。

「何か、他に思い出したらこちらまで連絡を下さい」

「はい、あの……でも、あまり期待しないで下さいね」

和久津智は頭を下げると、2人に背を向けた。

暫く歩いた後に振り返り、再び2人に向けて頭を下げると、そのまま歩いて行ってしまった。

「あの僕っ子、嘔吐いてやがるな」

そんな和久津智の背中を見ながら当麻は言った。

「彼女、“呪い”について何か隠してますね」

「何で分かる？」

瀬文は目線を和久津智の背中へ向けながら当麻に訊ねた。

「“呪い”について聞いた後、僅かですが動揺していました。でもそれを顔に出さずに、すぐに話を逸らしてきました。それもごく自然に。あんな虫も殺せない様な顔して、なかなか腹が据わってます」

「ふむ……」

「何にせよ、彼女から“呪い”について聞くのは難しいと思った方がいいかも知れないツスね」

「じゃあ、どうするんだ？」

「三宅さんも“呪い”について調べていました。あれだけ几帳面な人なら何か資料を残しているかも」

「……なら最初からそっちを探れば良かったんじゃないのか？」

「遅かれ早かれ彼女には会うつもりでしたし、ただものではないことが分かりました。つまり、結果オーライってことで」

「結果オーライ。じゃねえ！」

「“呪い”なんて眉唾だと思ってましたけど、あの態度だと何かありそうですね。現代に蘇るジャパニーズ・ホラー！高まる〜！」

「……………」

1人テンションの上がる当麻とは対照的に瀬文は思わず目頭を指で押さえていた。

その後、当麻と瀬文は再び三宅の遺留品を洗い直していた。

先日手に取った手帳、携帯電話以外にも、新品の腕時計、財布、名刺、煙草、100円ライター、何処かの街頭で買ったのであろうポケットティッシュがあったが、どれからも手掛かりは認められなかった。

「……………ねえな」

「ここに無いなら次は仕事場でしょう」

先日『ミシヨウ』にやって来た編集長へ電話をすると、三宅が使用していたノートパソコンがあることを聞かされ、2人は出版社まで足を伸ばした。

「ああ、『ミシヨウ』の方々ですね。お待ちしておりました」

相変わらず冴えない顔をした編集長の出迎えを受けた後、2人は三宅が使用していたデスクまで案内される。

「こちらです」

三宅のデスクの上には本人の几帳面な性格とは裏腹に堆く積まれた資料に加え、飲むと24時間戦えることで有名な某滋養強壮剤の空き瓶がまるでコレクションのように並べられていた。

「うわぁー、散らかっとなりますなあ!」

当麻はバラバラになっていた資料を手に取り、1枚1枚確認するが、“呪い”についての資料は見当たらなかった。

机の上の資料を粗方片付けると、その中から閉じた状態のノートパソコンが現れた。

当麻は椅子に腰掛けると早速ノートパソコンを立ち上げる。  
すると、ノートパソコンは起動直後にパスワードを要求してきた。

「まあ、予想はしていたが……。これじゃあ、中を見られないな」  
「無問題」

やたらと発音良く答えると、当麻はカタカタと何か入力していく。  
すると、ものの数分でパスワードを突破した。

「!どうやった?」

「名前、生年月日、あと手帳の中からそれっぽいワードをチョイスして試しただけです。こういう几帳面とズボラが同居してるような人が無意味な単語や数字の羅列をパスワードにしてるとは考えにくいッスから」

「それらがダメだったらどうする気だったんだ?」

「その時はその時で別の方法を試します。まあ、それでも1時間は掛からないと思います」

当麻はその気になれば国家の最重要機密にすら簡単にハッキング出来るほどの腕を持っている。

そんな彼女にとってパスワードなどあつてないようなものであった。

「呪い」、  
「呪い」……「つと」

当麻は当たり次第にフォルダやファイルの中身を見てみるが、肝心の“呪い”についての情報はなかなか見つからない。

次第にイラつき、貧乏揺すりを始める。

すると、机の上に並べられた空き瓶の内、端ギリギリに置かれていたものが貧乏揺すりの振動により落下した。

瀬文がそれを拾おうとすると、空き瓶の中に何かが入っていることに気が付いた。

「何だ？」

空き瓶を逆さにして振ると、中から小型のフラッシュメモリが出て来る。

「これは……」

「瀬文さん、それ貸してください」

当麻はそう言いながら瀬文の手からメモリスティックを奪い取ると、ノートパソコンの横に差し込んだ。

その中にはC Aコーポレーションという名前のフォルダが入っている。

中身を確認すると、そこにはまたいくつかのフォルダが入っていた。

その中から適当に1つを開き、更に中の画像ファイルも開く。

「これは……写真？」

後ろから覗き込んでいた瀬文が呟く。

「でも、誰の写真だ？女子高生？」

写真に写っていたのは眼鏡を掛けた一見地味に見える少女であった。だが、制服のブレザー越しでも分かるほど胸が大きく、その点では学校内に隠れファンクラブでも発足されてそんな感じである。

「他のも見えますよ」

当麻はフォルダの中に入っていた他の画像ファイルも順番にクリックしていった。

それぞれ別の少女の姿が写っている。

最後の1つをクリックすると、思わず2人は身を乗り出した。

「彼女は……」

「和久津智……!!」

そこには先程別れた少女が同級生の友人と思われる少女と共に並んで歩いている姿が写し出されていた。

「これは……一体？」

「つまり、こういうことですよ瀬文さん」

当麻は椅子の背もたれに全体重を預ける。

「三宅さん……三宅康博が和久津智に出会ったのは『偶然』では無かった。これ見て下さい」

当麻は和久津智の写真の更新日付を指差す。

「一番古いので1ヶ月前になっています。つまり、事前に彼女のことを知った上で接触したということですか」

「何の為に？」

「恐らく、この『CAコーポレーション』ってというのが関係あると思われる」

当麻は先程のファイルの入っているフォルダの名前を指差した。

「CAコーポレーションって言うとあのCAコーポレーションか。確か相当でかい企業だったな」

瀬文がぼつりと呟く。

「……確かこの間公安の連中が話題に出してたな。何かとキナ臭いところらしいが」

「ん？そっぴいや三宅の手帳に確か……」

当麻は目を閉じて、手帳の内容を思い出し出していた。頭の中で手帳に記された文字の羅列が脳を駆け巡る。

「……鳴滝小夜里、CAコーポレーション」

その2つの名前が当麻の頭の中にフラッシュバックされる。当麻は他のファイルを手当たり次第に開き始めた。そして、とあるファイルからお目当ての名前を見つける。

「鳴滝小夜里……ありました！」

「？その鳴滝とかいうのがどうかしたのか？」

「三宅の手帳に“CAコーポレーション 鳴滝小夜里 依頼”という記述がありました。日付もちょうど1ヶ月ほど前です。つまり……」

「なるほど、その鳴滝という奴の指示であの子たちを調べていた。ということだな。でも何故だ？何故、いち企業が女子学生の素行調査なんか？」

「もしかして“呪い”に関して？」

当麻は考える。

和久津智は“呪い”について何かを隠している。

その和久津智に三宅康博は接触した。

三宅康博はCAコーポレーションの鳴滝小夜里の依頼で事前に和久津智以下数名の少女を調べていた。

となれば、そのCAコーポレーションの鳴滝小夜里が三宅を介して和久津智に接触した理由はその“呪い”についてではないだろうか？  
それに……。

「瀬文さん、CAコーポレーションへ行きましょう。もし、鳴滝小夜里が三宅を利用していたならば、三宅の死に彼女が関与している可能性は十分にあります」

「ああ、そうだな」

時計を見ると、もうすぐ19時になるところであった。

「早く行きましょう。今ならば、まだ彼女に会える可能性があります」

「確かCAコーポレーションはこの出版社の近くにある。急げば30分も掛からない」

2人は編集長に一言だけお礼を言うと、そのまま出版社を飛び出してCAコーポレーションへと向かった。

### 第3話 『CAコーポレーション』

当麻と瀬文がCAコーポレーションを訪れた時には、時刻は19時30分を過ぎていた。

この時間であれば、下手をすると目的の人物は帰宅していてもおかしくないだけに、半ばダメ元で受付に訊ねると、目的の人物

鳴滝小夜里はまだ退社していなかった。

任意の事情聴取という名目で鳴滝小夜里へのアポイントを取り付けると、応接室へと案内される。

応接室の中で待っていたのは、ピンクブロンドの少し冷めた目をした女性であった。

2人の姿を見とめると、彼女は丁寧に頭を下げ、何処からか名刺を取り出した。

「鳴滝小夜里です」

手渡された名刺を確認すると、2人はこくりと頷いた。

「……立ち話もなんですので、取り敢えずお座りになって下さい」

鳴滝小夜里がソファへ座るように促すよ、2人は素直に従った。

当麻はボフォンと音を立てて座ると、改めて応接室を見回す。

それなりに高価な美術品が何点か飾られており、今座っているソファもいい革を使っていそうな感じである。

掛けられた絵を見ながら当麻は鳴滝小夜里に話し掛けた。

「ブルジョアですな。お宅の会社、相当儲かってるんですか？」

「……部外者の方にはちょっと」

鳴滝小夜里は肯定も否定もせず、ただそう述べるだけであった。当麻は顔を鳴滝小夜里へ向ける。

「突然ですが、三宅康博という名前に覚えはありますか？」  
「いえ、ありません」

鳴滝小夜里は当麻の問いに即答する。そして、何食わぬ顔で逆に訊ねた。

「その方がどうされましたか？」  
「自殺したんですよ。つい先日、ね」  
「そうですか」

鳴滝小夜里は当麻の言葉に表情を一切変えず、無感情に答えた。

「で、我々とはある人からの依頼でその三宅康博さんの自殺について調査しているんですが……」

当麻はわざとらしく不適な笑みを浮かべる。

「三宅康博さんは死ぬ前にあなたから依頼を受けていたことが分かりましてね」  
「そうですか。残念ですが、そのような方は全く記憶にございません」

しかし、またも素っ気無く返される。

鳴滝小夜里は当麻の揺さぶりにも動揺や焦りは一切見せずに涼しげな顔で答えるだけであった。

当麻は上着のポケットの中から、先程三宅のデスクで見つけたフラッシュメモリを取り出して、それを彼女に見せる。

「これは三宅康博のデスクから発見されたものですが、この中に私たちの会社の鳴滝小夜里という人物からの指示とある女学生の素行調査を行っていた。という内容が記載されています。それで話をお伺いに来たんですよ」

「……当社としては三宅という人物とは全く関わりがありませんし、私個人としてもそのような方とは面識がございません」

「そんな嘘、吐き通せると思っっているんですか？」

「嘘、とおっしゃられますよ」

「……………！」

目に見えて不機嫌な顔をし出した当麻とは裏腹に鳴滝小夜里は無表情ながら強気の態度を崩さない。

当麻は一先ず、矛先を変えることにした。

「では、質問を変えます。“呪い”について何か知ってますか？」

「……随分、漠然とした質問ですね」

鳴滝小夜里は僅かに首を捻る。

「そんなオカルトじみたこと、警察が調べることなのですか？」

「最近の警察はそういうことも調べるんですよ」

当麻は答える。

しかし、鳴滝小夜里は少しだけ目を閉じると、再び無感情に言った。

「その“呪い”が何を示しているか分かりませんが、私に答えられることはありません」

瀬文は当麻の肩に手を置く。

そして自分の方へ引き寄せると鳴滝小夜里に聞こえないように小声で訊ねた。

「……どうすんだ？とりつく島がねえぞ？」

「……この手の聴取に慣れきってやがりますね。それにこれが正式な捜査じゃないこともこちらがあまり強引な捜査が出来ないこともおそらく分かっついていやがります」

当麻と瀬文の捜査はあくまで依頼ありきの捜査であり、警察主導の捜査ではない。

つまり、非公式に近い捜査である。

ただでさえ三宅康博の死は世間一般でも警察内部でも自殺として扱われているのだ。

立場のあまり強くない『ミシヨウ』では、いくら怪しくとも、相手の協力無しにそれ以上の追及は出来ない。

相手に突っぱねられたらそれまでなのである。

瀬文は当麻が手に持っているフラッシュメモ리를指差した。

「……そのメモリの中を見せてやったらどうだ？」

「……名前があるだけじゃ弱いですね。2人が一緒に写っている写真とかあれば話は別ですが」

写真。

口にした言葉から、当麻はあることを思い出した。

そして、再び鳴滝小夜里に話し掛ける。

「ところで話は変わりますが、鳴滝さんにはご兄弟なんかはいるんですかねえ？」

「……それは答えなければいけないことでしょうか？」

「逆に聞きますが黙秘するようなことですか？まあ、調べればすぐに分かることツスけどね」

「……妹が1人」

鳴滝小夜子は伏し目がちに答えた。

今まで機械的に受け答えしていた彼女の顔が初めて翳りを見せる。

当麻はニヤリと笑うと、いつも持ち歩いているキャリアバッグから自前のノートパソコンを取り出した。

ノートパソコンを開いて起動すると、手に持っていたフラッシュメモリを脇に差し込み、中からとある画像ファイルを表示させた。

「イヤン、この子ちよー可愛いー！」

モニタを見て、当麻は一昔前の女子高生のようなノリでわざとらしいリアクションをする。

相手の突然の行為に鳴滝小夜里は訝しげな目を向ける。

すると、当麻もその目を見返した。

「こんな妹がいたら素敵だと思いませんか？」

そう言うとノートパソコンのモニタを鳴滝小夜里へと向けた。

「……………！」

モニタの中にはピンクブロンドの髪をツインテールにした小柄な少女が写っていた。

鳴滝小夜里はその少女を見て、僅かに目を見開く。

だが、その後は何も言わずに沈黙した。

まるで、これ以上余計な発言をして相手に付け入る隙を与えてしまわないようにと。



私の妹だとして、それがその三宅とかいう方の自殺と何の関係があるんですか？」

「考えても見て下さいよ。自分の妹の写真が自殺した男の遺品の中に残されてるんですよ？更にあなたの名前まで残されてる。1人ならまだしも、2人ともですよ？ここまで来て自分は無関係、はちよつと苦しいんじゃないツスカねえ？」

「……………！」

鳴滝小夜里の指が膝を素早くトントンと叩き始める。

ここに来て、彼女は初めて苛立ちのようなものを見せた。

「その、三宅康博って方が我々を勝手に付け回っていた。ということじゃないでしょうか？」

「その可能性もありますね」

鳴滝小夜里が提示した可能性を当麻は否定しなかった。

「でも、こういう可能性もあります」

当麻は一呼吸置いてからゆっくりと言った。

「あなたが三宅康博に指示して、自分の妹を見張らせてた」

「……………何の為に？」

「単刀直やくにやうに言いましょうか？」

「単刀直入、な」

瀬文が横からツッコミを入れる。

「うっせーぞハゲ！ちょっと噛んだだけだろーが！！」

当麻は返す刀で吠えた後、「オッホン」と軽く咳払いをした。

「“呪い”について。だとあたしは考えてます」

「“呪い”……？そんなオカルト、馬鹿馬鹿しいとは思わないんですか？」

「ええ思っていないですね。少なくともあなたは」

「……！」

「あなた、“呪い”について何か知ってますね？」

「……何を根拠に？」

「“呪い”が何を示しているか分からないって、さっき言いましたよね？普通“呪い”って聞いたたら、それが何か重要なキーワードを示しているとは思わないツスよ」

「……」

「“呪い”を示す“何か”。あなたは知っているんじゃないですか？」

「……」

鳴滝小夜里は再び沈黙した。  
重苦しい空気が辺りに漂う。

「何事かね？小夜里くん」

その空気を破ったのは、突如部屋の中へ入って来た男の声だった。

2人は同時に男の方へ向く。

30代くらいで不健康そうな顔が特徴的だった。

「失礼ですが貴方は？」

瀬文が訊ねると、男は明らかに不機嫌な顔で答える。

「このCAコーポレーションの社長をやっている宇田川与志夫だ。  
警察の方々が何の用ですか？」

「八、任意の事情聴取であります」

「ではお引取り願おう。任意なのだろう？小夜里くんもそれでいいな？」

「……はい」

鳴滝小夜里は宇田川の言葉に頷く。

さながら鶴の一声であった。

こうなってしまうともう詰みである。

これ以上踏み込めるだけの権限も材料も2人には無い。

「……分かりました」

そう言うと、瀬文は席を立って宇田川に一礼した。

当麻も渋々ノートパソコンを閉じるとキャリアバッグへ仕舞う。

「……では、こんな遅くまで失礼いたしました」

瀬文はそう言うと、体を45度に折り曲げた。

宇田川は瀬文を見もせず、2人に聞こえるようにフンと鼻を鳴らす。

瀬文は姿勢を正すと、そのまま応接室を出て行った。

当麻も瀬文に続く。

「……覚えてろよ」

応接室を出る直前に当麻は宇田川たちに背を向けたまま聞こえるか聞こえないかの声で呟いた。

第3話 『C A コーポレーション』（後書き）

うくん、掛け合いがちょっと強引になってしまいました。

推理小説は読むのですが、何分書くのは難しいです。

まあ、当麻は推理が当たってるにしろ外れてるにしろ、ある程度ハツタリ利かせて鳴滝小夜里から情報を引き出そうとした。  
と解釈していただければ、それで十分です。

## 第4話A 『餃子屋にて』

「焼き10追加ー！」

当麻は半ば荒れ気味に声を上げる。

彼女の目の前には空になった大皿が3枚重ねられていた。

「あいよ！焼き10」

威勢のいい声が狭い店内に響き渡る。

と、すぐにジューっと餃子を焼く音が聞こえてきた。

宇田川に追い出された後、瀬文と別れた当麻は1人、馴染みの餃子屋『中部日本餃子のCBC』へと足を運び、いつもと同じテーブルに座る。

先のCAコーポレーションの件では、いらぬ介入で手掛かりを掴み損ねた為に当麻はとにかく苛立っていた。

その苛立ちを食欲に変え、餃子を食べることで鬱憤を晴らしている。

「ちょっと食べ過ぎじゃないの？」

そんな当麻を見て、眼鏡を掛けた長身の青年が心配そうに声を掛けた。

彼は地居聖チイサトシ、当麻の元彼である。

彼もまたこの餃子屋を馴染みにしており、夕食を取りに来たところ、たまたま当麻が先客として来ていたのを見つけて彼女の真向かいに座ったのだった。

別れた後もこうしてちよくちよく絡みに行くあたり、まだ当麻に未

練があるようだ。

そんな地居の心配を当麻は、まるで周囲を飛び回る蠅の如く迷惑がる。

「あのさあ」

「何？」

「あたしたち別れたの。分かる？ドゥーユーアンダスタンド？だから、あたしが何をどれだけ食おうがあんたにや関係ないわけよ」

当麻はそう言うと、箸の先を地居の目の前へと行儀悪く向ける。彼女の中では、地居との日々はすでに過去のものとなっていた。

「そんなこと言われたって、別れの話とかも特にされてないしさあ。何か振られたって感じ、全然しないんだよね」

地居も反論する。

「急に連絡取れなくなって、それでようやく連絡ついたら何か怪我してて、それで何時の間にか別れたことになって……。これで納得しろって方が無理でしょ？」

「あのさ、あたしは刑事。そんなもって、あんたは学生。元々無理だったの、あたしたちは」

「いや、全然意味分かんないし……」

「はい、焼き10お待ちね！」

2人の会話を熱々の焼餃子が遮った。

当麻はその1つを箸で摘み上げると、小皿のソース（辛子入り）につけてから口の中に放り込む。

「バカウマ！」

当麻が至福の声を上げると同時に、ガラガラと店の戸が開く音がした。

そして、6人組の少女たちが姦しくむさ苦しい店内へ足を踏み入れてくる。

「ここの餃子、すっごく美味しいんだよねー！」

「ったく、餃子なんて口が臭くなるだけだつてのー！」

「とか言いながらも付いて来てるであります」

「あら？私、あれ好きよ。匂いが気になるならニンニク抜きを頼めばいいじゃない」

「オヤジー、餃子のニンニク抜き肉抜きニラ抜きキャベツ抜き一丁」

「それ、ただの餃子の皮だよ……」

6人組の少女たちは何やら楽しげに話しながら店の奥へと進んで行った。

「へー、こんな店に女の子だけで来るなんて珍しいなあ」

地居は店に入って来た少女たちを見とめると、何とはなしに言った。

その言葉を聞くなり、当麻は急に機嫌の悪い顔をしてみた。

餃子をソースに浸しながら地居を睨み付ける。

「……………？どうしたの？」

「それ、あたしに対する当てつけ？」

「ちよっ、何？いきなり？」

慌てる地居に当麻は更に辛辣な言葉を浴びせ掛ける。

「女1人で毎日のようにここへ来るあたしは女捨ててますねーって、  
そういうことか？ああ!？」

「いくらなんでもそれは曲解し過ぎ!それこそ、本当に意味が分からないって」

「フン!」

当麻は再び焼き餃子を口に放り込み、すぐに至福の声を上げた。

「バカウマ!」

「……………」

突然の当麻の奇声に6人組の少女たちが一斉に驚いていた様子をチラッと見て、地居は無言でため息をついた。

当麻もそれ以上は何も言わずに焼き餃子を箸でつつく。

「あのさあ……………」

「ゆで10追加!」

「まだ食べんの!?!」

地居が思わず突っ込むが、当麻はひと睨みしただけで、それきり口を閉ざす。

すると、かすかに重い空気が漂い始める。

2人の間に沈黙が訪れるのを避けたい地居は何か話題を探して目を泳がせた。

そして、何かを思い出したかのように口を開いた。

「……………そう言えば、さっき“呪い”がどうとか言ってたけどさあ」

“呪い”という言葉に当麻は思わず反応する。  
ついでに6人組の少女たちも何故かぴくりと反応していた。  
当麻は訝しげな目で地居に問い掛けた。

「……あたし、んなこと言ったっけ？」

「言ってたよ。ついさっき、ゆで餃子食べてる時に愚痴っぽくさ」

「そうだったっけか……？」

当麻は焼き餃子を咀嚼しながら、先程までの自分の言動を思い返していた。

愚痴を言っていたのは確かに事実だが、彼女も一応はプロフェッショナルであり、プライベートで更に事件に無関係な人間に捜査状況をバラすような真似はしていないつもりだった。

「結構話してたよ。自殺がどうかと、 “呪い” がどうかかさあ」

「そう……。じゃあ今すぐ忘れる。でなければ、殺す！」

「殺すって……。沙綾さあ……最近、物騒になったんじゃないの？  
昔はそんなじゃなかったのに……」

「イイ女は1秒ずつ進化していきますから。つーか、名前で呼ぶな  
！」

「名前くらい別にいいじゃんか。……でもさあ、 “呪い” で自殺で  
しょ？」

地居はまるで少年のように顔を輝かしている。

「まるでミステリー小説の世界じゃない！金田一とか明智とかさ！」

「事实は小説より奇なりって言って、実際に起きてる事件の中には  
作り物の事件よりも奇怪な事件があるんだよ。……つーか、あんた  
いつから文学青年になったの？ループ量子重力理論でノーベル賞獲

るんじゃないかったっけ？」

「それはそれ、これはこれ、だよ。……で、“呪い”って結局何だったワケ？やっぱり何かのトリック？」

「さあね。つか、話すわけねーだろこのボケ！」

というより、話せるほど捜査が進展していないのが正しい。

「俺には何でも話して欲しいんだけどなあ……」

寂しそうに地居は言った。

「ハイ！ゆで10お待ち！」

店主が威勢よくゆでたての餃子をテーブルの上に置いた。

そのタイミングで後ろの少女たちの中の1人が店主に注文をする。

「あー、おじさーん。こっちに焼き餃子お願いしまーす」

随分と可愛い声である。

「……どっかで聞いた声だなあ」

当麻は後ろを振り返った。

店の奥の方の席には、それぞれバラバラの学校の制服を着た少女たちが座っていた。

1人1人の顔に見覚えがある。

そして、その中の1人を見て、当麻は彼女たちが誰なのか思い出す。

「ああー……！！！」

思わず叫ぶと、そのまま立ち上がり、右手に持った箸の先を彼女たちへと向ける。

「ちょ、どうしたの!？」

地居は当麻の行動に吃驚して、向けた箸の先を視線で追った。

そこにはロングヘアの美少女が啞然とした顔でこちらを見ていた。

「……知り合い？」

「いただきました!」

まるで隠れんぼで最後まで残っていた相手を見つけた鬼のように当麻はほくそ笑んだ。

## 第4話B 『るいのオススメ』

「あーそうそう！あたし、最近美味しいお店を見つけたんだ！」

るいが朗らかにそう言ったのは、ついつい話が弾んでしまつて大分遅くなつてしまい、そろそろ晩御飯をどうしようかな。と思案していた時であつた。

「おー！るい先輩オススメの店ですか！？」

るいにとてもよく懐いているこよりは、その美味しい店とやらに興味津々のようである。

「どうせ、ちくマヨ専門店とかそういうんじゃないの？」

花鶏は全く興味無さそうに「ふあーあ」とひと欠伸する。

ちなみにちくマヨとは、ちくわの穴にマヨネーズを詰めただけという、最近ますます料理研究家じみてきた僕にとっては料理と呼ぶのも腹立たしい代物である。

「ほえー、ちくマヨ専門店ですかー！一体どれだけ種類があるんでしょうかねー？鳴滝の想像力では思い付きませんよう」

「うーん、考えつく限りだと、ちくわの中のマヨが明太子マヨとかからしマヨとかわさびマヨとかかなあ……」

僕もこよりに乗つかつてみた。

すると、るいは嬉しい時の子犬のように目を輝かせている。まるで、ピンと立った耳とふりふりする尻尾が見えるようだ。

「おほー、それ美味しそう！トモ、今度作ってよ！」  
「ハハハ……今度、ね」

別に宗教上の理由があるわけでもないし、作るのは全然構わないのだけれども、ちくマヨとなると何となく気が乗らない。

「モロヘイヤマヨにラフレシアにマンドラゴラ……」

茜子は相変わらずの様子で妖しい草の名前を次々と並べる。そもそも最後のは実在すらしていない。

「あのねえ……、それだけでお店をやっていけるわけがないじゃない！せめて、何か他にサイドメニューとかそういうのが無いと……」

「空気読め」

これまた相変わらず空気をお読みになられない発言をかます伊代。茜子に窘められて「えっ!？」という顔をする。

これさえ無ければなあ……。と思いつつ、これが無ければ伊代じゃない。という矛盾した思いが駆け巡る。

伊代には来世でもっと空気が読める人間に生まれ変わって、それで幸せになってもらおう。

「で、るいが言う美味しい店って、何のお店なの？」

伊代のおかげで話が見事に途切れたので、取り敢えず本筋へと戻すことにした。

「うーんとね……餃子屋さんなんだ」

「餃子屋さん？」

「うん、実はこの間ベース弾いた帰りなんだけどね……」

るいは時々、路上でベースを弾いている。  
ベースと聞くと、何処か地味に思えるが、その実かなりのテクニクを要求されるらしい。

ギターと違って、ベースだけで聴かせられるような演奏が出来るのなんてプロでもなかなかいないという。

意外に思えるかも知れないが、この頭の中の9割がご飯を占める彼女にはベーシストとしての才能があるのだ。

そして、その演奏に感動した人たちのささやかなお布施が彼女の生活の糧となっている。

「ここから結構近くにある餃子屋さんなんだけどね、この間初めて入って一口食べたなら今まで食べたどの餃子よりも美味しかったんだあ」

るいはとびきりの笑顔で言った。

まるで背景のキラキラが見えるようである。

食べ物のことになると、るいは本当に幸せそうな顔をする。

「へー、そんなに美味しかったの？」

「うん！だから皆にも食べてもらいたいなあって」

誰かに薦めたくなくなるほど美味しい餃子。

僕も幾分興味が湧いてきた。

餃子と一口に言っても、実は結構奥が深い。

スタンダードな焼き餃子一つを取っても、中に入れる肉と野菜の比率をどうするか。

包み方をどうするか。

焼き加減をどうするか。

それらによつて味は大きく変わつてしまふ。

更に拘るなら、中の肉を牛、豚、鳥、どの肉にするか。

はたまた肉の代わりに魚貝類を入れるのか。

焼かずに茹でるのか。

それとも揚げるのか。

…… e t c

その気になれば何千万種類の餃子が作れてしまふ。

こうして餃子のことを考えていると、途端に色んな餃子を試したくなつてくる不思議。

(何か急に自分の中で餃子熱が燃え上がっていくのを感じるぞ！)

今後の研究の為にも、その餃子を是非食してみたい。

「そんなに美味しいなら僕も試してみたいなあ」

「智が行くつて言うなら、私が行くのも吝かではないわね」

仕方ないわね、といった感じで花鶏が言った。

こういうところで素直じゃ無いのが花鶏である。

「筋肉巨乳と大悪魔セクハラ」が行くなら茜子さんも行かざるを得ないですね」

茜子は両手を挙げた謎のポーズを取つたままで答える。

ると茜子はワケあつて花鶏の家に居候している為、1人だけ別行動とはいかないのだ。

そんな茜子の横で伊代とこよりは2人で顔に手を当てて「うーん」と考えている。

「そうですねー。智センパイや花鶏センパイに茜子センパイも行く

なら、鳴滝も行きたいです！」

「そうね……。ちよっと遅いけど、私もあの子の顔を見たら、少し興味が湧いてきたわ」

こよりも伊代もその餃子屋に興味を示したようだ。

「でも伊代とこより、家の方は大丈夫なの？家族の方とか心配しない？」

僕や花鶏は1人暮らしだし、るいと茜子は花鶏の家に居候しているから、どんなに遅くなっても問題はない。

だが、こよりと伊代は今も家族と一緒に暮らしているし、特にこよりはこのメンバーの中で最年少である。

「それに伊代はお母さんは大丈夫なの？」

伊代は伊代で、お母さんが事故の後遺症で手を不自由にしており、大変だと聞いた。

「ああ……。帰るのが遅くなるくらいなら、連絡を入れれば大丈夫よ。それに、お土産にそれをいくつか買って行けば、晩御飯の用意の手間も省けるし」

伊代は一見優等生で、曲がったことが嫌いな真面目さんに見えるが、実はそこまで堅い性格ではない。

寧ろ、柔軟性に優れているとさえ言える。

自分自身に課したマイルールさえ破らなければ、社会のルールを外れることもある程度は許容出来てしまう。

それが彼女、白鞆伊代なのである。

「うーん、うちも連絡さえ入れれば大丈夫だと思います。朝帰りするわけじゃないですし」

こよりも問題ないと主張する。

「そつか。じゃあ、行こうか。るい、案内してよ」

「うっし、付いて来い野郎共！」

るいは先程まで空腹でぐったりしていたのが嘘のように威勢良く号令を掛ける。

(緊急用の食料として、駄菓子屋で買ったいくつかの菓子を途中で口に入れたおかげである)

るいに案内されて来たのは、『中部日本餃子のCBC』という餃子屋であった。

まったく聞いたことのない名前である。

店構えはお世辞にも綺麗とは言い難い。

こついうのを知る人ぞ知る隠れた美味しいお店。とでも言うのであるうか。

店に着くなり、花鶏が文句を言った。

「何よここ？あまり美味しそうに見えないわよ」

花鶏の言う通り、一見さんにはどうも入りにくい雰囲気だ漂う。それを聞くと、るいはあつという間に不機嫌な顔になる。

「じゃあ花鶏は入んな。ここで待ってる」

「ハア？何も入らないとは言ってないでしょ、この短気凶暴女」

「何よ、このセクハラ変態女！」

「！！！」

「……！！」

また始まった。

最早恒例行事とも言える、るいと花鶏の掴み合い。

流石に観客からお金は取れないけれども。

何かあるとよく衝突する2人にはあるが、何だかんだでそれなりに仲が良かったりもする。

喧嘩するほど仲が良い。と昔の偉い人は言った。

それならば、仲良く喧嘩してくれと温かい目で2人を見守る僕に茜子が一言。

「その性悪ブルマー。悟ったような顔で傍観すんな」  
「……………」

何とか2人の気が済むのを待つてから、僕らは店の中へ入ることにした。

店の戸を開けるなり、もわっと餃子の匂いがした。

「へいらっしやい！」

店主らしきおじさんが威勢のいい声で僕らを迎える。

店の中を見回すと、中にはカップルらしき男女が一組いるだけで、他に客はいないようであった。

「ここの餃子、すっごく美味しいんだよねー！」

るいは店に入るなり嬉々とした声を上げる。

それと同時に腹の虫も鳴った。

そんなるいに呆れながら花鶏はため息をついた。

「まったく、餃子なんて口が臭くなるだけだったの!」  
「とか言いながらも付いて来てるであります」

こよりがさり気無く突っ込むと、花鶏が小声で「こよりちゃん? いいお茄子が手に入ったんだけど?」と言っのが聞こえた。するとこよりは「ひいひいひい」と言いながら慌てて僕の後ろへ回り込んだ。

「あら? 私、あれ好きよ。匂いが気になるなら抜いて貰えばいいじゃない」

これまた空気の読めない発言。

流石に茜子ももう突っ込まない。

代わりに店主のおじさんに向かって声を掛ける。

「オヤジー、餃子のニンニク抜き肉抜きニラ抜きキャベツ抜き一丁」

「それ、ただの餃子の皮だよ……」

取り敢えず突っ込んでおいた。

入り口付近の席は2人しか座れなかった為、僕たちは奥の方の席へ向かった。

そこも6人は難しかったので、2つのテーブルにメンバーを3:3で分けて座る。

ちなみに、片方が僕とるいとこより。

もう片方に花鶏と伊代と茜子という風に分けてある。

ふと、さっきのカップルらしき男女を見ると、何やら喧嘩しているみたいであった。

長身の男が何か謝っているように見える。

そういう情景を見てみると、ちょっと羨ましくもある。

僕は“呪い”のせいで、ああやって男女の関係になることが出来ない。

精々、仲の良い女友達が限界である。

とは言え、中には同じ学園の宮や花鶏みたいに僕が一応女であるにも関わらず好意を寄せてくれる子もいるが、それはちょっと違う気もする。

「?どしたの、トモちん。何か寂しそうな顔」

るいが心配そうに声を掛けてくれた。

「ううん、何でもない。ちょっと、ね」

それだけ言うに止めた。

その理由を話すことは出来ないのだから。

そう、それは仲間でも。

親友でも。

僕の心の中に罪悪感が徐々にではあるが募ってくる。

いつまで僕は彼女たちを騙さなければいけないのだろうか？

少なくとも“呪い”が解けない間は絶対だ。

じゃあ、“呪い”はいつ解けるのか？

「バカウマー!」

“呪い”とそれによる人生の苦難について思案していた僕を現実に引き戻したのは、突如聞こえて来た声であった。

声のした方を見ると、カップルの女性の方が美味しそうに焼き餃子を頬張っている。

更に追加オーダーを店主のおじさんに告げた。  
彼女の横顔を見ると美人の顔立ちだなあと思う。  
だが髪はボサボサ、服は色褪せて、みすばらしいとさえ言える。  
それでも女性であることが分かるのは本物の女性であるからなんだ  
ろう。

少しでもバレたらアウトな僕には彼女のような格好はとてもする勇  
気が無い。

「あーやだやだ。ああやって女を捨ててるのって見てられないわ」

花鶏がなかなか強烈な毒を吐いたので、僕が注意する。

「ちよっと、花鶏。聞こえたらどうするの？」

「別に」

「別に……って」

「そうよ。誰かも分からない人をそんな風に言うのは良くないと思  
うわ。あなただって……」

「伊代センパイ！それ以上はシートです」

「えっ？でも、今はこの子の……」

「シート」

「……………」

伊代は納得のいかない顔で矛を収めた。

これはこよりのナイスプレーである。

後で頭を撫でてあげよう。

と、その時であった。

「……………そう言えば、さっき“呪い”がどうとか言ってたけどさあ」

その言葉に僕たちは戦慄する。  
言葉の主はカップルの男の方である。

“呪い”

会話の内容を全部聞いていたわけではないので、どの流れで出たのかは分からない。

きっと僕らの抱える“呪い”とは別の話題なのだろう。

僕は、僕らはそうだと思い込んだ。

だが、何か嫌な感じがする。

「智センパイ!“呪い”って、もしかして鳴滝たちのことでしょうか？」

それでも不安になったこよりが小さな声で僕に聞いてくる。

「断定は出来ないけど、きっと別の話だよ。学校の怪談とか？不思議とか都市伝説とかさ。“呪い”なんて言葉自体は別に珍しくないし」

「そう……ですよね」

「うん、そう。きっとそう」

それはこよりにじゃなく、きっと僕自身に言っていたのだろう。しかし、次に聞こえて来た言葉で僕らは再び戦慄する。

「自殺がどうか、“呪い”がどうかさあ」

自殺。

“呪い”。

この2つの言葉が示すものを僕らは知っている。

だが、そんな筈は無い。

そんな筈は無いんだ。

僕は僕に言い聞かせる。

他の皆も僕と同じような顔をしていた。

あの茜子さえもいつものように茶々を入れてくることはせず、カッ  
プルの男の方をチラチラと見ている。

嫌な沈黙が訪れる。

「ハイ！ゆで10お待ち！」

その沈黙を破ったのは、店主のおじさんの威勢のいい声であった。

そう言えば、まだ注文もしていない。

ここへは餃子を食べに来た筈なのだ。

漂う空気を変えろという意味でも、何かを注文した方がいいような  
気がした。

「あの一、おじさん。こっちに焼き餃子お願いしまーす」

「あいよー！」

店主のおじさんはこっちを見ずに答える。

と、カップルの女性の方が僕らを見ていることに気が付いた。

その顔に見覚えがあった。

先程入り口にいた時は特に気にしていなかったから僕は気が付か  
なかった。

彼女は……。

「ああーーーーー!!!」

僕らに箸を向けながら、彼女が大声を上げる。

突然のことになるいたちはおののいた。

でも、僕は動かなかった。

動けなかった。

そんな僕を見て、るいが話し掛ける。

「知ってる人？」

僕は無言で頷いた。

そう、彼女は今日の夕刻、任意の事情聴取と称して僕に“呪い”について聞いて来た刑事さんであった。

第5話 『邂逅・前編』 (前書き)

今回は区切りのいいところで前後編に分けました。

## 第5話 『邂逅・前編』

ここは、某所のとある警察病院。

明かりの点いていない夜の病室で、瀬文はじつと男の姿を見つめていた。

まるで、それからは決して目を背けてはいけない。

そう決意しているかのように。

男はピクリとも動いていないが、規則的に鳴る心電図の電子音が彼がまだ生きていることを知らせる。

「志村……」

瀬文はベッドの上で死んだように眠り続けている後輩の名前を呼んだ。

だが、当然のように返事はない。

以前、医師から「呼び続けていけばいつかは応えてくれるかも知れない」「諦めてはいけない」と言われたことがある。

それは気休めであり、またある意味では事実であるのだろう。

医学がどんなに進歩しようと、すぐに限界というものが訪れる。

最後には「かも知れない」という神頼みに近い精神論へと行き着いてしまう。

今分かることは、現代医学は彼

シムラユウサク

志村優作を救ってはくれない

であろう。ということであった。

彼がこうなってしまったのは、ある事件が原因であった。

当時、警視庁特殊部隊（SIT）の隊長だった瀬文は志村優作と共に外国人犯罪グループが立てこもる倉庫へと突入した。

外国人犯罪グループをほぼ制圧したその時、志村は突然まるで気で

も狂ったかのように銃を乱射し始めた。

瀬文は懸命に志村を説得するも、彼は瀬文の言葉にまるで耳を貸さなかった。

そして彼はその銃口を瀬文に向け、引き金を引いた。

殺される。

瀬文がそう覚悟した次の瞬間、志村の体を数発の弾が撃ち抜いた。それは、紛れも無く彼が発砲した弾であった。

その日から、彼は目覚めることのない眠りに落ちてしまった。

(もう二度とここへは来ないで下さい！)

彼のたった一人の家族である妹の志村美鈴シムラミレイが放った言葉が瀬文の頭の中でリフレインする。

志村優作が病院に運ばれたその夜、瀬文は初めて美鈴と出会った。

彼女は病院へ来る前に警察で事情を聞いていたのである。

瀬文を厳しく問い詰めた。

「どうして、兄を撃つたのですか？」

瀬文は否定する。

撃つたのは自分ではないと。

それを聞くと美鈴は憎悪を孕んだ瞳でキッと瀬文を睨み付けた。

「認めないんですか？自分の非を？」

瀬文は返答に困った。

あの時の状況からは、瀬文が志村優作を撃つたようにしか見えなかった。

事実、警察側はこれを『部下に殺されそうになった瀬文が正当防衛の為に発砲した』と処理した。

誰もがそれを事実と疑わなかった。

ただ1人、瀬文を除いて。

「……そうですか。失望しました。もう、もう二度とここへは来ないで下さい！」

美鈴からの強い拒絶に瀬文はただ「違う」と否定することしか出来なかった。

彼女は今でも兄を撃つたのは瀬文だと思っている。

それは彼女にとっては確信と言ってもいい。

美鈴にとって、瀬文は兄・優作の敵であった。

ピッ。。

静かな病院内で、心電図の電子音が鳴る。

「瀬文さんは神の手って信じますか？」

志村優作の主治医である海野亮太ウシノリョウタはある日、瀬文にそう話した。

「神の手？」

「まあ、志村さんを治せるかもしれないっていう医者かね、いるらしいんですよ」

「本当ですか？」  
「分かりません」

海野はあっけらかんと言った。

「科学者としては信じたくない……。しかし、実際にいるらしいんですよ。まあ、霊能力者というか、超能力者というか……。細胞を再生する能力を持っているって人が」

瀬文は無言で海野の顔を見つめている。

海野はばつが悪くなったのか、少しだけ自嘲気味に笑った。

「まあ、らしいんですけどね」

『ミシヨウ』へ来てから、常識をはるかに超えた力を目の当たりにする機会が増えたとは言え、流石に海野のその言葉は何処の餓鬼の妄想だ。と瀬文も最初は思っていた。

だが、ある日を境にその話が真実であることを身を以って知った。瀬文は右手でそつと左肩に触れる。

初めて『ミシヨウ』へ来た時に担当した事件で、瀬文は真犯人である脇智宏ワキチヒロの反撃を受け、左肩を骨折した。全治3ヶ月の重傷だった。

それから数日後、瀬文が街の中を歩いていると、1人の女性と左肩をぶつけてしまった。激痛を覚悟した瀬文であったが、いつまで経ってもそれは訪れなかった。

不思議に思っ左肩に恐る恐る触れてみると、まるで嘘のように痛みが消えていた。

それどころか、折れた骨は完全に修復されていたのであった。

「志村……」

再び後輩の名を呼ぶ瀬文。

彼女ならば彼を志村優作を救えるのではないか。

常識を超えた力。

“SPEC”ならば……。

瀬文は、『さつぱりおろし天つゆねぎだこ』が入った銀だこの袋を近くのテーブルの上に置くと、そのまま病室を後にした。

店内には餃子を焼くジュウツという音だけが響き渡っていた。

香ばしい油の匂いが辺りに漂ってくる。

当麻は少女たちをぐるっと見回した。

全員に見覚えがある。

彼女たちは、三宅康博の残したファイルの写真に写っていた少女である。

あの鳴滝小夜里の妹と目された少女もそこにいた。

「あの……一体、どちら様ですか？」

メガネを掛けた亜麻色の髪の少女が不安な表情で訊ねて来た。

すると、当麻は床に置いたキャリアバッグの中を漁り始めた。

少女たちが訝しげな目でその様子を見ているのを特に気にもせず、中からノートパソコン、分厚い本数冊、100円ショップで買ったであろう取っ手付きの鍋などを取り出す。

目的のものが見つからなかったのか、今度は右手で上着のポケット

を触って確かめる。

それでも目的のものが見つからず、首を傾げていたが、すぐに何かを思い出して左腕を吊っている三角巾の中に右手を差し込んだ。そこから黒い手帳のようなものを取り出すと、「あった、あった」と言いながらそれを開いて目の前の少女たちに見せた。

「ちわーっす。こういう者ですけど、お話聞かせてもらえませんかねえ？ねえ、『智ちゃん』さん」

そう言うと当麻は、『智ちゃん』と呼ぶ黒髪の少女　和久津智へニコリと笑いかける。

彼女も苦虫を噛み潰したかのような顔をしていた。

それでも、彼女の可愛らしさや清楚さが失われないのは流石の一言である。

「突然、どうしたんだよ沙綾？」

当麻は後ろから声を掛けてきた地居に対し、振り返らずに帰れというジェスチャーを取った。

「ほら、ここからは警察の仕事。部外者は去れ！あと、名前で呼ぶな！……」

「えっ？ちよっ？なに？マジで意味分らないんだけど」

「帰れ帰れ！」

突然の退場勧告に狼狽する地居を当麻は無理矢理外へ追いやる。

「……じゃあ、今日は帰るよ」

地居はそう言うと、未練がましそうに当麻を見ながら店を出て行く

た。

地居がいなくなった後、当麻は少女たちの顔を改めて見回す。というよりも、ガンを飛ばしていた。

あまりに柄が悪いので、鳴滝小夜里の妹と目される少女が脅えた顔で赤毛の少女の後ろへと回った。

和久津智が表情を取り繕い、まるで何もやましいところはない。と言った表情で当麻の方へと向き直った。

「あの……刑事さん。僕にまだ何か用ですか？」

「あなたに……じゃなくて、あなたたちに用がある。って言ったら？」

「僕たちに……？」

「そう“呪い”について、ね」

その言葉に、和久津智を除く5人の少女の顔が変わった。

少女たちの目は明らかに当麻へ警戒の色を見せ始める。

「トモ……誰、この人？」

赤毛の少女が和久津智へ訊ねた。

彼女は当麻に目を合わせようとせず、必要以上に警戒しているようだ。

或いは、他人と目を合わすことの出来ない人見知りなのか。

和久津智は目でこちらを伺った後、赤毛の少女を含めた他の少女たちに説明する。

「この人は……警視庁の刑事さん。僕も今日会ったばかりなんだけども。ほら、今日僕が溜まり場に着いたの、いつもより遅かったでしょ？この刑事さんに会ってたから遅くなったんだ」

「なるほど……。所用で遅くなったのはそういうことだったの

ね。で、何で刑事なんかと会ってたの？」

銀髪の少女が和久津智を問い詰める。

「今刑事さんが言ったことについて、だよ」

本当は三宅康博の自殺の件も含まれているのだが、和久津智はその部分を隠した。

どうやら、この少女たちをあまり巻き込みたくないらしい。

だが、どちらにしろ既にこちらは他の少女たちにも関係あるということを理解しているので、それは無駄な努力であると言える。それでも和久津智は精一杯の抵抗を見せた。

「刑事さん。さつきも言いましたよね？ “呪い” なんてただの流行の噂話です。そのことについて知りたいなんて、今時の学生としておかしい行動ですか？ これ以上僕に聞くことは無い筈です」

「『僕』に……ねえ」

ここで『僕ら』と言わないところに、他の少女たちをさり気無く庇っているのが垣間見える。

やはり、この和久津智という少女はとても賢しい。

このまま腹芸をしてもいいが、掛かる手間を考えればあまり効率的ではない。

それに、時間を無駄に掛けるのも主義ではない。

「何であたしたちが “呪い” に関して調べているか、それは分かりますかねえ？」

「依頼を受けたから……ですよね？」

「そう。三宅康博の自殺について、不審な点があるという依頼を受けたから」

当麻は一呼吸置いてからゆっくりと言った。

「三宅康博の自殺の原因がその“呪い”である。というね」  
「……………」

和久津智は何も言わない。

ただ、その可愛らしい瞳に当麻の姿を映していた。  
あまり沈黙していると不利になると思ったのか、和久津智は取り敢えず口を開いた。

「…………いくら何でもそんなの有り得ませんよ。これだけ科学の発展した時代に“呪い”で人が死ぬとか」  
「あたし、“呪い”で人が死ぬってあると思うんですよねー」  
「え？」

当麻の言葉に面を食らったかのように和久津智は聞き返した。

「…………じゃあ、話を変えましょうか。今度はあんたが庇ってる後ろの子たちが、実は無関係じゃないって話」  
「！それってどういう……………」

和久津智の言葉を最後まで聞かずに、当麻は先程中を漁ったキャリ―バッグから数枚の写真を取り出した。  
それを少女たちへ見せる。  
少女たちはそれを見るなり絶句した。

「これ…………は…………？」

和久津智が青い顔をしながらそれだけ口にした。

それらの写真は全て隠し撮りで少女たちの日常を写し出していた。

「この写真は三宅康博さんの仕事場にあったメモリからプリントアウトしたもの。もっと驚くのは、この写真の元をこのメモリに保存した日付。日付は1ヶ月前のものだった……」

「それは、つまり……?」

「あなたが三宅康博と初めて出会ったと思われるのは多く見積もっても1週間程前。つまり、三宅康博はあなたたちのことを知って、その上で接触した。と、そういうことになる」

「何の、為に?」

「鳴滝小夜里という女からの指示。と、三宅康博の残した手帳には記載されていた。ま、当の本人はしらばっくれてたけどね」

「お、お姉ちゃんが!」

赤毛の少女の後ろに隠れていた小柄な少女が身を乗り出して来た。やはり彼女は鳴滝小夜里の妹であった。

和久津智は後ろの青い髪の少女に目配せする。

青い髪の少女はミッシヨン系の某学園の制服を着ていた。

何より特徴的なのは、手袋やタイツなどで肌の露出を極端に控えているところであった。

極度の潔癖症なのだろうか。と当麻が思索していると、青い髪の少女は一言。

「……嘘ではないみたいです」

と呟いた。

彼女の言葉を聞き、鳴滝小夜里の妹は更に動揺する。

「で、私たちが無関係じゃないってのはどづいことなの?」

今度は銀髪の少女がこちらを睨み付けて来た。  
見た目が日本人離れしており、外国人のハーフかクォーターなのだ  
ろうと当麻は推測する。  
それも恐らくはロシア系。  
だが、その態度は短気な当麻の鼻についた。

「……年上に訊ねる態度じゃないなあ」

年下に舐められるのはあまり好きではない。  
当麻は銀髪の少女へガンを飛ばす。  
まるでスケバン同士の睨み合いとなったところで、当麻の後頭部へ  
強い衝撃が走った。  
思わず声が出る。

「痛っ!!」

「痛っ!!じゃ、ねえ」

その声に当麻が振り返る。  
すると、当麻の背後に瀬文がぬつと立っていた。

「せ、瀬文さん？」

「女子高生と張り合うんじゃない。少しは大人の態度をしる。口臭  
女」

瀬文はそう言うと、店主に「焼き5」を頼んだ。

第5話 『邂逅・前編』(後書き)

写真のプリントアウトはC Aコーポレーションから餃子屋へ行く間にやったというところで。

第6話 『邂逅・後編』(前書き)

後編です。

## 第6話 『邂逅・後編』

痛む後頭部を押さえながら当麻は訊ねた。

「瀬文さん、何でここに？」

「俺が餃子を食いに来ちゃいけねえのか？」

瀬文はそれだけ言うと、少女たちを見回した。

「で、これはどういう状況なんだ？」

「実はかくかくしかじかで……」

当麻はわざとらしく声を潜めた。

瀬文は眉をひそめる。

「かくかくしかじか……で、分かるわけねえだろ」

「ったく、このハゲは空気読まねーなー！察しろ、この唐変木！」

瀬文は躊躇なく裏拳を当麻の顔面に打ち込んだ。

「あだっ！」

至近距離からの強い衝撃に当麻は思わず2、3歩下がる。

「つつー、は、鼻血が……」

当麻の鼻からたらーっと一筋の血が流れる。

思わず、当麻は右手で鼻を摘んで、上を向いた。

「だ、だでいどうるんでどう？（訳・な、何するんです？）」「  
「ほう？分からないのか？」

「……………てめーは肥溜めにでも落ちてろ」

「餓鬼かてめえは。っていうか、餓鬼でも今時そんな捨て台詞吐か  
ねえぞ」

「あ、あの……………」

2人が低レベルな喧嘩をしていると、和久津智が困惑した表情で割  
つて入る。

「お見苦しいところをお見せして申し訳ございません」

彼女に気付くと、瀬文は直立不動のまま頭を下げた。

「あなたは確か和久津智さん……………でしたよね？」

「あ、はい。その節はどうも……………」

瀬文の馬鹿丁寧な口調に和久津智も思わず畏まる。

瀬文は他の少女たちを一瞥してから、和久津智に訊ねた。

「ご学友……………にしては制服がバラバラのようですが、彼女たちは？」

「あ、えつと……………」

和久津智は当麻と瀬文に他の少女たちを軽く紹介した。

チラチラとこちらを警戒しながら見ている赤毛の少女は皆元るい。

先程当麻と睨み合いをしていた銀髪の少女は花城花鶏。

赤毛の少女の側でびくびくとこちらを伺っている小柄な少女は鳴滝こより。

心配そうな顔で他の少女たちを見ているメガネの少女は白鞘伊代。

隅っこの方でじっとこちらを見ている青い髪の少女は茅場茜子。

少女たちの紹介が終わると、瀬文はふと頭に何か引つ掛かるものを感じた。

「……失礼ですが、和久津智さんを除いた他5名の方々。前に会ったことがありますでしょうか？」

「いや、無いわ」

花城花鶏がきつぱりと否定する。

すると、当麻は苛々した様子で瀬文を睨み付けた。

「まったく、この脳筋が！ついさっきまで一緒に見てただろうが！」

そう言うと、当麻は取り出した写真を瀬文へ乱暴に渡した。

渡された写真を見て、瀬文は納得する。

「なるほどな。三宅の遺品の中に残っていた奴か」

「後は説明しないでも分かりますね？あたしが今何してるか？」

「ああ……」

瀬文は改めて少女たちを見回した。

まだあとけなさを残す顔立ちの少女たち。

彼女たちが三宅やCAコーポレーションのような大企業にマークされているとはとても信じられない。  
瀬文はなるべく抑えた声で言った。

「……我々は少なくともあなたたちの敵ではありません。どうか、知っていることがあるならば、協力を願います」

瀬文からそう言われた和久津智は暫く考え込んだ後、他の少女たちの方に振り返って言った。

「……ねえ皆。これ以上隠し通すことも出来ないし、いつそのことこの刑事さんたちに“呪い”のこと、話した方がいいと思うんだ。恐らく、僕たちに何か秘密があるってほぼ確信してるだろうし」

すると、他の少女たちは色めき立った。

花城花鶏が真っ先に和久津智の意見に反対する。

「智、流石にそれは早計だと思うわ。判断材料が少な過ぎるし、何よりこの刑事たちは胡散臭いっての」  
「私もそう思う……」

白鞘伊代も花城花鶏に同調する。

そして、当麻をチラリと見た。

「男の方の刑事さんとはかく、女の方の刑事さんは……」  
「へーへー、そーですか。あたしは信用出来ないってか！フン！」

当麻はまるで小学生のように不貞腐れると、元の席にドスンと乱暴に座り、焼き餃子を頬張る。

「ああ……バカウマ！」

その様子を傍目で見ながら瀬文はため息をつく。

「……確かにこれは信用出来ねえな」

瀬文の言葉に和久津智は苦笑しながら言った。

「僕はあの女の刑事さんの方が、寧ろ逆に信用出来ると思うなあ」

そう言うと、和久津智はチラッと当麻を見た。

皆元るいが首を傾げて訊ねる。

「なして？」

「あの刑事さん、見た目よりもずっと凄い人だと思うよ」

和久津智は当麻との少ないやり取りを通して、彼女に何処か底知れぬものを感じていた。

常に相手を観察して違和感を探ろうとする目、こちらの意図を瞬時に察する頭の回転、それでいてそれを相手に悟らせまいとする振り舞い（これは買い被り過ぎだが）。

自分が嘘吐きであると自覚し、相手をどうすれば口先だけで丸め込めるかを考える人間だからこそ、当麻が自分にとても近い人間であると和久津智は感じた。

なので、ここで意固地になって秘匿し、それで当麻たちを敵に回してしまうのはリスクがとても大きいように思えた。

特に和久津智自身の秘密は知られるだけでヤバいものなのだ。

普通に調べてもバレることはないかも知れないが、目の前の相手は普通じゃない。

「それに、これは僕の勘なんだけどね……」

和久津智はそう言うとニコリと可愛く笑った。

「この人たちなら話しても大丈夫だって気がするんだ」

秘密を話すことで、もしかしたら味方につけることが出来るかも知れない。

秘密を隠すメリットと秘密を話すデメリットを天秤にかけたら、ここは話すべきだと和久津智は考える。

「トモがそう言うなら……あたしは文句ないよ」

皆元るいはそう言うと、ニカツと笑って見せた。

先程反対した花城花鶏と白鞘伊代も渋々頷く。

また、残りの2人も和久津智に同調するようだ。

どうやらこの和久津智という少女は他の少女たちからかなり信頼されているらしい。

「ご協力、感謝します」

瀬文はそう言って感謝の意を示した。

和久津智は軽く頭を下げると、先程とは打って変わって真剣な眼差しとなる。

「ただし、話す前にいくつか言っておきたいことがあります。まず、これから話すことは、とても荒唐無稽に聞こえるかも知れませんが、全て事実です。なので、とにかく信じてください。それと、この話は他言無用です。僕らの命に関わることなので。それがあなたたちに話す条件です」

「はいはい、分かりましたよ」  
「了解しました」

当麻と瀬文はそれを承諾する。

和久津智はひと呼吸間を置いてからゆっくりと話し始めた。

「ではお話します。呪われた世界の話を……」

#### 都内某所

「冷泉！」

明かりを点けずに部屋の中央でじつと体育座りをしていた男はその声にハッと顔を上げる。

声の主は作業服のようなものを着ており、何やらビニール袋を持って男の方へと歩み寄ると、それをジャージの男に掲げて見せた。

「うどん食べる？インスタントだけどさ」

「例の赤い奴ですか？」

ジャージの男は答えた。

しかし、作業服の男は首を横に振る。

「残念。どんの方」

「寧ろ、そっちの方がいいです」

「じゃ、お湯入れるから、ちょっと待ってる」

作業服の男は部屋の電気を点けると、中に備わってる小さいキッチンへ向かうと、やかんの中に水を入れて火をかけた。

ジャージの男は再び、体育座りの体勢に戻るとそのままじっとしていた。

そんな男を見て、作業服の男は眉をひそめる。

「冷泉。電気も点けずに部屋の真ん中で何やってたのよ？」

「……振り返っていたんですよ。自分の人生とか、色々だね」

「あー、やだねえ……やだやだ。暗い暗い」

作業服の男は、テレビの電源を点けた。

「ほら、『鉄拳』でもまた一緒にやろうよ。今度は俺、勝っちゃうよ?」

「何度やっても私には勝てないって分かってるでしょ？」

「今日なら勝てる気がするんだよねえ……」

「気のせいですよ」

ジャージの男は冷ややかに言った。

ゲームで勝てても、現実ではこの男に勝てる気がしない。

暫くすると、やかんから湯気がもつもつと巻き上がったので、作業服の男はコンロの火を止める。

そしてビニール袋から2つのカップうどんを取り出し、蓋を開けてかやくと粉末スープを入れてからお湯を注いだ。

蓋を閉じ、割り箸を重石代わりに乗せたところで作業服の男が「しまった!」という顔をする。

「あー、レンジでチンするご飯も買ってくりゃ良かったなあ。残っ

たつゆにそれ入れると美味いんだよ」

「確かに美味しい。ですが、塩分摂り過ぎであまり健康には良くないですよ」

「美味しいもの食べて死ねるなら本望だねえ」

作業服の男はニヤリと笑う。

5分後。

出来上がったカップうどんを2人で啜った。

「いや〜、やっぱり美味しいねえ。このカップうどんは。特にこのお揚げが最高だよ」

「……………」  
「ん？どうした冷泉。さつきから黙りこくっちゃって」

「……………今度は何を見て欲しいんですか？」

「お！察しがいいねえ。話が早くておじさん助かっちゃう」

作業服の男は先程のビニール袋の中から黄色い物体を取り出した。それは、カリフォルニア産の檸檬であった。檸檬をジャージの男に投げ渡す。

「ちよつと居場所を見て欲しいんだよねえ。“呪い”持ちの、さ……………」

ジャージの男は何も言わずにレモンにガブガブと齧り付いた。

「ラミパスラミパスルルルル〜！」

そして、何処かで聞いたような呪文を唱える。

作業服の男は、その様子を見ながらほくそ笑む。

「頼むよー、冷泉ちゃん」

そう言いつと、再びカップうどんを啜り始めた。

## 第7話 『陰謀の影』

“呪い”は踏めば、その人の命を奪う。

“呪い”はその代償として、その人に素晴らしい才能を与える。

“呪い”を持つ者にはそれを示す痣がある。

和久津智から“呪い”について語られた内容はおおよそこういう内容であった。

そして、あの場にいた少女全員にその“呪い”の痣があるとのことであった。

少女の中の1人花城花鶏が不服そうな顔で左腕の袖をまくって、その痣とやらを見せてくれた。

彼女はそれを“聖痕”と呼んだが、この際呼び名はどうでも良かった。

痣があったということが重要なのである。

和久津智はその後、不敵にもこう言っただけ。

「“呪い”についてお話したと引き換え、と言つと何ですけど、1つ頼まれて欲しいことがあるんです」

頼まれて欲しいこと、とは“呪い”について、警察側でも調べて欲しいとのことであった。

奇しくも彼女が生前の三宅康博に依頼したと同じである。

寧ろ、こつちこそ“呪い”について知りたいところであったが、彼女たちが知っていることは先に話したことが全てで、“呪い”の本質について知っていることは実は少ないと言つた。

学生の身分では調べられる情報量にも限りがあり、それ以上を知る為に警察として協力して欲しいとのことであった。

抜け目無えなあ。と当麻は思ったが、特に断る理由は無かったので

取り敢えずはその申し出を受けることにした。

その後、夜遅かったということもあり、日を改めて詳しく話を聞かせて欲しいと約束して別れた。

そうして1人、『ミシヨウ』へと戻ってきた当麻は、今日1日に起きた出来事を回想していた。

“呪い”に関係する人物、『智ちゃん』ことと和久津智との接触。

新たな手掛かりを求め、三宅康博のデスクから“呪い”に関連するものと思われる資料の発見。

その資料から炙り出した鳴滝小夜里とCAコーポレーションへの対面。

そして、和久津智との再会と“呪い”の正体。

まるで何者かに導かれたかのようにとんとん拍子でここまで来た。それが何処か気に食わなくもある。

「……何か大きな陰謀を感じますなあ」

当麻は誰もいない室内で1人ごちた。

まるで、背後に潜む大きな何かへと聞かせるかのように。

「……敷かれたレールの上を素直に歩くと思うなよ」

当麻は自分の席へ座ると、ノートパソコンを起動させた。

そしてあつという間に警察内部の情報へとハッキングしてみせる。

その中から、和久津智に聞いた“呪い”について、何か情報が無いか探してみる。

どんな些細な情報にでも目を通した。

結果、何も見つからなかった。

「おかしい……」

当麻は思わず呟いた。

あまりにも情報が無さ過ぎるのだ。

いくら“呪い”が眉唾なものだとしても、その性質は自分たちの知るあることによく似ていると当麻は感じた。

それならば、それに近い事件や資料がそれとなく残されていてもおかしくない筈である。

それが全く見つからない。

まるで、呪いに近付いてはいけない。とでも言いたいかのように。

鳴滝小夜里が“呪い”の存在を知ることが出来たのはたまたま身内に“呪い”を持っている人間がいたからなのだろうか。

そう言えば、三宅康博も“呪い”についての調査はあまり進展していないようであった。

「三宅康博……」

今にして思えば、三宅康博の自殺についても疑ってかかるべきかも知れない。

彼は鳴滝小夜里、及びCAコーポレーションからの依頼で和久津智たちを調べていた。

それがここに来て自殺などと素直に信じられるわけがない。

何者かに消されたと考える方が自然である。

「……何処のB級ヤクザ映画だよ」

当麻は自分の考えを一笑に付す。  
しかし、もしも三宅の死が単純な自殺でなければ、殺害の動機は間違いない。“呪い”、またはそれに関連することであろう。

普通の通り魔はあんな風に自殺に見せ掛けて人を殺したりはしない。だが、この時当麻はもう一つの可能性も視野に入れた。  
ノートパソコンからある資料を開く。  
人名などがずらっと並んだりリストを見て当麻は呟く。

「……SPEC」

翌日、当麻と瀬文は三宅康博の遺体の解剖結果を聞きに鑑識課へと出向いた。

鑑識課の男が面倒臭そうに三宅康博の遺体の状態を説明する。

一通りの説明を受けて、当麻はある部分に注目する。

「首を絞められた跡が2つ……」

「まあ、1度首くくったけど失敗して、もう1度首くくったんでしようなあ」

「或いは絞殺した後に自殺に見せ掛ける為に首を吊らせた」

「これを殺人と言いたいのか!? もう勘弁してよ。自殺で処理しちゃってるんだからあ!!」

鑑識課の男は辟易する。

当麻は不機嫌な顔を隠さずに舌打ちした。

組織とはこうだから面倒臭い。

上が決めたことは絶対であり、覆すことを許さない。

結果、真実は埋もれていく。

「現場検証は？自殺とは言え、一応やったんだろ？」

瀬文が訊ねると鑑識課の男はのど飴を口に放り込みながら答えた。

「しましたけどお……、特に何も見つからなかったんですよ。上が自殺と処理したのだから、一応根拠あつてのことですからね」

「でも、首の絞め跡は自殺にしては少し不自然では？」

「そりゃあ、現場にだって同じこと指摘した者もいましたよ？でも、事件現場は元々人通りの少ない路地裏の廃ビルですし、数少ない目撃者も三宅康博が1人でここへ向かうのを見たと言っているんです。あるかどうか分からない超絶トリックを考えるよりも自殺と考える方が自然でしょ？」

「目撃者？」

「あー、もしかして今度はその目撃者を疑ってますう？言っただけおきますが、その目撃者だって地元のチーマーで、ガイシャとの接点はほぼ無いだろうってことですからね！」

「……分かった」

瀬文は難しい顔で当麻へ振り返った。

「おい、どうする？仮に自殺じゃなかったとしても、その証拠を見つけないのは絶望的な感じだぞ？」

「……取り敢えず、事件現場へ行ってみっか」

「一応、プロが現場の捜査をしたんだ。俺たちだけで見つかるような証拠ならとっくに見つけてるんじゃないか？」

「プロでもミスはあります。それに、自殺だと思って現場検証してたなら見落としたものがあるかも知れません」

「……それも一理あるな」

瀬文はこくりと頷く。

当麻たちは鑑識課を後にした。

鑑識課の男は2人が去ったのを確認すると携帯電話を取り出した。

「ああ、もしもし。こちら鑑識課です。実はですねえ……」

当麻と瀬文は次に三宅康博の自殺の現場へとやって来た。

場所は田松市繁華街の路地裏にある廃ビルであった。

元々は様々なテナントが入っててそれなりに盛況だったビルなのだろうが、今は見る影もない。

その2階のとあるフロアが事件現場であった。

「ここで三宅康博は首を吊った……」

三宅康博はこのフロアの隅で首を吊った状態で発見された。

足元には踏み台にしたと思われる消火器が転がっていた。

遺体や現場から遺書の類は見つからなかったものの、状況から見て自殺と判断された。

当麻は首を傾げる。

「いくら自殺でも消火器なんか踏み台にしますかねえ？」

「他に踏み台になるようなものが無ければするんじゃないか？」

「だって消火器ですよ？瀬文さん、消火器の上に立ってますか？それに、本当に自殺するつもりならば踏み台くらい用意するでしょうよ」

「突発的な自殺だったんじゃないか？急に死にたくなって本当に死ぬって奴は珍しくない。俺としてはふざけんなって話だがな」

瀬文は憤った。

瀬文は警視庁特殊部隊（SIT）の隊長であり、「命、捨てます！」が合言葉ではあったが、その実人の命を重く見ている。

命を奪うことは勿論、自ら命を捨てるような人間を許すことが出来ないものである。

「突発的な自殺なら首吊りを選ぶのはナンセンスですよ。だってここはビルツスよ？屋上から飛び降りればいいじゃないですか」

「……高所恐怖症だった、とか？」

「そもそも首吊りするのに何でここへ来たんでしょ？かねえ？首吊るなら自宅でもいいじゃないですか」

「自殺する人間の思考は分らんが、自宅ではしたく無かったんじゃないか？」

「瀬文さん、一旦自殺の可能性は捨てましょう。でなきゃあのタダ飯食らいの国家の犬たちと同じ思考でしか動けません。それにここへ1人で来た理由。これはすぐく重要だと、あたしは思うんすよねえ」

「ここへ来た理由……か」

この廃ビルのある場所は人通りが少ない。というよりも存在しないと言った方がいいという程の正に陸の孤島とも言うべき地帯であった。

地元のチーマーや密入国したであろう外国人のグループ、またはホームレスなどがたまに出入りしているようだが、事件前後の時間は現場付近には誰もいなかったという。

目撃者として証言した地元のチーマーもこの現場付近にいたわけでは無く、ここへ続く路地に三宅康博が入って行くのを見ただけであり、そこから先の三宅康博の動向は誰も知らない。

そんな場所へ1人でやって来る理由は無い。

瀬文は可能性の1つを呟いた。

「誰かに呼び出された……とか？」

「誰かって誰に？」

「てめえがそれを聞くか？まあ、呼び出したんだから三宅康博自身  
が知ってる人間、或いは三宅康博が無視出来ない人間ってところだ  
な。全く得体の知れない奴から呼び出されて、素直にそいつの言う  
ことに従うような奴はいない」

「妥当ですね。そうなると呼び出した人間は相当絞れると思います」

当麻の言葉に瀬文は当たりを付ける。

「……例のＣＡコーポレーションの連中か？」

「まだ何とも言えないです。取り敢えず現場に何か怪しいものが無  
いか探しましょうか」

2人は事件現場をくまなく捜し始めた。

地面、壁、天井とありとあらゆる場所に痕跡が残っていないか調べ  
る。

しかし、やはり新たな物的証拠は見つかりそうに無い。

「……タダ飯食らいの国家の犬とは言え、やはり仕事はプロだな。

俺らが見つけられるレベルのものは全て見つけたと見える」

「いや、それでもないみたいですよ」

そう言うと当麻は壁の染みらしきものの周りを指でなぞる。

「……？それがどうかしたか？」

「クンクン……なるほど、ね」

当麻はそう言うと、その場所から指紋を採取する。

「瀬文さん、行きましようか」

「何処へだ？」

「次の証拠探しに、です」

「……ああ、分かった。連絡有難う」

男はそう言つと携帯電話を切つた。

「『ミシヨウ』の犬が。わざわざ終わった事件を掘り返そうとするとはな……」

男は携帯電話を掛ける。

「もしもし、馬場か？実はなあ……」

用件を告げると男は携帯電話を切つた。

「これはもう『終わった』事件なんだよ。今更蒸し返して殺人なんてことが分かつたら困るんだ」

男はチラッと後ろを見る。

「ですよね、『常務』？」

## 幕間

「ようやく彼らも尻尾を掴んだみたいだねえ?」

ピシヤリと盤面に駒を打ち付け、老人は言った。

向かい側で腕を組んだ男が盤面を睨み付けながら口を開く。

「いえいえ、彼らはまだ何も知らないのに等しいですよ」

そう言うと、男も駒を盤面に打ち付ける。

「古い先の短いあなたには残酷でしょうが、まだまだプロリーグですよ」

男の妙手に老人は感心したように唸る。

「古い先短いと早く続きが見たくて見たくて仕方無くてねえ……だから連続ドラマなんてうつかり見られない。一度見たら3ヶ月は生き延びなきゃならないからねえ」

老人は駒を打つ。

それは、ここに来てそんなところに置くか。という手であった。

男が呆れたように笑うのを見て、老人が上目遣いで訊ねる。

「この哀れな老人に君が描くシナリオ……もう少しだけ教えてはくれんかねえ?」

「まだ結末をどうしようか考えている段階です。焦って進めてもお互いに良くないでしょ?」

男は無下にそう言ってから駒を打つ。  
あと数手でこの勝負を終わらすことが出来そうだ。  
男は自然とほくそ笑んでいた。

「それもそうだねえ……」

老人は間を空けずに駒を置く。

先程置いた無駄とも思える駒がここに来て脅威と化した。  
形勢逆転。

男の顔が僅かに歪む。

老人はいやらしい笑みで男を伺った。

「どうだい？将棋は奥深いだろう？一見無意味に思える手が、ここに来て相手の背後に突き立てる刃となる……。君も気を付けたまえよ」

(この狸ジジイめ！)

男は心の中で目の前の老人を毒づいた。

「……なるほど、肝に銘じておきますよ」

「ハッハッハッハ！……ところで、『彼ら』の介入も君のそのシナリオ通りなのかね？」

老人は横に置いた緑茶を手に取り、一口啜った。

「ああ、『彼ら』ですか。……あんな小物が手を出したところで自分のシナリオには何の影響もありませんよ」

「そうか。それならいい。……しかし、興味深いとは思わないかね

？連中が追っている“呪い”とやら」

「『彼ら』はその“呪い”とやらに、えらくご執着みたいですがね。言わせてもらえば、あんなもの、ただの劣化コピーですよ」

「劣化コピー、とはこれまた厳しい」

「その優れた才能とやらを使う為に、日常を暮らすに不便な枷を背負って、それを少しでも破れば死んでしまう……。そんな能力の何処に利用価値があると思いますか？」

「それは君がアレの存在を知っているからだよ」

老人は再び緑茶を啜る。

「『彼ら』はアレの存在を知らない。それなら“呪い”みたいに不便なものでもダイヤモンドを見つけた気になっているんだろうさ」

「でも、そのせいで『彼ら』に邪魔をされるのは面倒だ……」

男は先程手に入れた角を盤上に置いた。

「ほう？そんな手があったか……」

「打てる手は打っておいて損は無い……。見ての通り、完璧主義者なものでしてね」

唸る老人の顔を見て男は再びほくそ笑んだ。

「『待った』は無しですよ？」

老人は「うーん」と唸ったまま盤上の駒を睨んでいる。

男は満足そうにそれを見届けると、すくつと立ち上がった。

「何処へ行く？まだ途中だぞ？」

「着いた勝負に興味はありませんので。ああ、途中退室だからリタ

イアってことで、あなたの勝ちでいいですよ」

「ほほう、これはラッキー。勝ちを拾えてしまった」

老人は好々爺のような笑みを浮かべた。

男はその笑みに苛立ちを覚える。

「……拾った勝ちで喜んじやっていいんですか？あなたにもプライドの1つや2つはあるでしょう？」

「捨てる神あれば、拾う神あり。戦争を生き抜き、何も無い焼け野原から今を作ってきた者としては、拾うことに躊躇は無いよ。せっかくのチャンスを下らんプライドで逃すのは愚かだ」

「僕はカッコ悪いのが嫌なんですよ。常にカッコ良くいたいんですよ」

「ほほう……若いなあ、君は」

「ええ、そして時代は若者のものです。いずれ、あなた方ご老人にはご退席を願いますよ」

「ハッハッハッハ！言うな、小僧！」

老人は口では笑ってはいたが、その目は一切笑っていなかった。鋭い目で男を射抜くように見つめる。

男は無言で部屋を後にした。

老人は男が去った後の盤面を見つめた。

「……フン、逃げおったか。これなら全然ひっくり返せない手じゃない。下らんプライドで勝負を捨てたのはどっちかねえ？」

老人はそう言うと、緑茶を飲み干し、ごくりと喉を鳴らした。

「まだまだこの席は渡せんよ……。居心地がとってもいいんでね」

## 第8話 『衝突する異能』

夜の街。

人々は行き交い、建物の明かりは絶えることなく灯り続けている。

そんな華やかな情景にも、一步奥へ入ってしまったえば裏の顔というものが存在する。

そこには様々な人や思惑が存在しており、表よりも複雑なコミュニケーションを形成している。

そして、それらが陽に当たることは決して無い。

全ては月明かりすら照らさない、夜の闇の中である。

そんな裏舞台の暗い道を1人の少女が堂々と歩いている。

ユン・イエンフェイ  
尹央輝

大陸出身で、見た目はとても小柄な少女だが、その実、裏社会では彼女の名を知らぬ者はいないという大物である。

常に帽子を被り、その小さな体をすっぽり隠すようなコートを暑い寒いを問わずに着ている。

彼女はまるで日の光を避けるように、昼間は滅多に出歩かず、こうして夜の暗がりの中で生きて来た。

そんな彼女を人は吸血鬼と揶揄していた。

今夜も野暮用を1つ片した尹央輝は、隠れ家までの道を1人歩いている。

しかし、この日は普段とは何かが異なっていた。

(……つけられている?)

尹央輝がそう気付いたのは、大分前からであった。背後に何か尋常では無い気配を感じている。

安易に振り向くことはせず、微妙に歩く速度を変えたりしてみると、追跡者もそれに準じて動いていることが分かった。

彼女の立場上、こうしてつけられたり、時には刺客が仕向けられたりすることは珍しいことでは無かった。

そういう時は撒いたり、返り討ちにしたりするのだが、今回の相手はいつも相手にする連中とは毛色が違うことを彼女の勘が告げる。

このまま撒くことは出来ないであろうと悟った。

(……このままでは埒があかない、か)

尹央輝は軽く舌打ちすると、その場に立ち止まり、右手をコートのポケットに入れ、中のライターを握り締めた。

そして、背を向けたまま背後にいるであろう、その相手へ聞こえるように声を張り上げた。

「誰だ!? 私に何の用だ!?!」

短く簡潔に訊ねる。

すると、パチパチと乾いた音が辺りに響いた。

尹央輝が思わず振り返ると、まるで清掃員のような格好をした中年の男が拍手しながらこちらへと向かって来るのが見えた。

「……いやー、流石だねー。こんなにあっさり尾行に気が付くなんて。おじさん、ちょっとシヨック」

清掃員風の男はおちゃらけたような表情で抜け抜けと言った。

尹央輝は怪訝な顔つきで男を見る。

「……誰だ貴様は？」

「さあ、誰でしょう？」

清掃員風の男はそう言うつと肩をすくめ、尹央輝の元に近付いて行く。一見するとただの中年の清掃員に見えるが、その佇まいや気配は常人のそれとは明らかに異なっていた。少なくとも相手はプロフェッショナルであることが伺えた。

隙を見せたらやられる！

そう直感した尹央輝はコートからライターを取り出した。それと同時に清掃員風の男も懐から拳銃を取り出し、それを彼女へと向ける。

2人は対峙した。

尹央輝は吐き捨てるように言った。

「物騒な奴だ。いきなり拳銃を出してくるとはな！」

「……平和的な交渉は無理ってことになっちゃうのかな？」

清掃員風の男も残念そうにそう言うと、引き金に手をかけた。そんな風に拳銃を向けられているにも関わらず、尹央輝は余裕の笑みを浮かべている。

清掃員風の男は首を捻り、不可解そうに訊ねた。

「一応聞くけどさあ、何でそんなに余裕綽々なワケ？銃とライターじゃどっちが強いか子供でも分かると思うけどなあ」

「教えて欲しいか？」

尹央輝は薄く笑った。

「なら……見る！！」

尹央輝はそう言って、ライターに火を灯した。

清掃員風の男は思わずその火を見てしまう。

次の瞬間、清掃員風の男の全身を恐怖が支配した。

冷や汗がどつと流れ、体はまるで張り付けられたかのように動かない。

「！？こ、これは……！？」

「ククク……」

尹央輝は目を赤々と輝かせながらニヤリと笑うと、懐から刃渡りの長いナイフを取り出す。

そして、動けなくなった男を冷たい目で見下ろした。

「貴様が何処の誰で、何の理由があつて私を追い掛け回してるのかは知らん。だが、ここで会ったのが貴様の運の尽きだ。……全てを洗いざらい話すなら苦しまずに殺してやるがどうする？」

尹央輝の言葉に、清掃員風の男は無理矢理の笑顔で返す。

「……悪いけどさあ、お嬢ちゃん。おじさん、洗いざらい話すつもりも、ここでみすみす殺されてやるつもりも無いんだよね」

すると、彼の背後から新しい影がぬっと現れた。

「なっ！？」

尹央輝は突然の闖入者に一瞬の動揺を見せる。その際に新たに現れた男は口を大きく開いた。

「ハーーーーーッ！」

男は尹央輝に向けて、何かを吐き出す。すると、今度は尹央輝の方が身動きを取れなくなっていた。

「くっ！？何だ……これは！？」

全身から力の抜ける感覚がして、彼女の手からナイフが滑り落ちた。そのまま地面へ膝から崩れ落ちる。

今の彼女は立っていることすら叶わなかった。次の瞬間、彼女の腹部へ衝撃が走った。

「！？カハッ」

小さな呻き声を上げて、尹央輝はそのまま意識を失った。

清掃員風の男が突き出した拳を引くと、力の抜けた彼女の体はそのまま地面へうつ伏せに倒れる。

そのまま彼女はぴくりとも動かなくなった。

それを確認すると、清掃員風の男は拳銃を懐に仕舞い、額の汗を拭いた。

「……フーツ、いやー、ビックリしちゃったよー。あれが“呪い”なのかあ。“SPEC”と何ら変わらんね、ありゃ」

「ホンマ、ええ加減にしといて下さいよ津田さん。僕がいなかったらあんた確実に死んでいましたよ？」

先程現れた男は清掃員風の男を津田と呼び、そう言った後に倒れた尹央輝を肩に担ぎ上げた。

「聞き捨てならないなあ……」

津田は眉を顰めて言った。

「お前を呼んだのは俺だろ？お前があそこで出て来ることは必然だったんだよ。つまり、計画通り！ニヤリって奴だよ」

津田はニヤリと笑うと、上着のポケットから煙草の箱を取り出し、中から1本口に銜えて火を点けた。

暗い闇の中で煙草の火だけが彼を怪しく照らす。

津田は美味そうに煙草を吸うと、すぐに煙を吐き出した。

「……かあー、たまらんねえ。仕事の後の一服は。これだけの為に生きてるって言っても過言じゃないよ」

「津田さん、早く行きましようよ。この場に長居したらあきませんって」

「東野、もっと余裕持てよ。戦場だと、意外とお前みたいなのが早く死ぬんだぞ？」

「冗談キツイですって」

「ほら、早くそいつ連れてけ連れてけ。一応女の子だから丁寧に扱えよ？」

「ハイハイ、分かりましたよ。津田さんも早く来て下さいよ？」

「分かった分かった、ほら、行け行け」

東野と呼ばれた男はそのまま振り返り、元来た道に戻って行った。

1人、暗い路地裏に残された津田はそのままスパと煙草を吸っ

ていた。

紫煙の中で、先程尹央輝から受けた謎の感覚を思い出し、思わず恐怖に打ち震える。

(……たまんないねえ。この年齢になって、そんでこの仕事やって来て、まだブルっちまうことがあるなんてな。世の中まだまだ知らないことばかりってことか……糞忌々しいねえ)

津田は銜えた煙草を地面へ捨て、足で踏み潰すと、東野の後を追ってその場から立ち去った。

月も照らさぬその道は、まるで何も起きていないかのようにすぐに闇と静寂を取り戻していた。

オフィス街の一角に、今はもう使われていないビルがある。

既にオーナーの手からも離れ、テナントも全て引き払われていた。

誰のものでもなくなったそのビルに、やがてホームレスや不法滞在者たちが住み着き始めるのは必然であった。

夜露を凌げ、充分な広さを持つそのビルが彼らの巣と化するのに、さほど時間は掛からなかった。

しかし、彼らの存在に不安を覚えた近隣住民の通報により、警察の一斉介入が行われた。

その結果、彼らは呆気なく一掃されてしまう。

彼らが追い出された後も暫くの間、警察の見回りが続けられたおかげで、そのビルには誰も寄り付かなくなり、気が付くとそこは無人の塔となった。

更に月日が経ち、警察の目も緩やかになった頃、その無人の塔へ新たに目を付けた者たちがいた。

それは年端もいかぬ少女たちであった。

少女たちは、そのビルの屋上を溜まり場とすると、毎日のように集っては他愛のない話などをして時間を潰し、夜になると解散してそれぞれの家路につく。

そんな日々を毎日の様に過ごしていた。

少女たちにとって、そうしている時間が何よりも幸せだったのだ。

「今日はお昼で授業終わりだったとは言え、ちよつと来るのが早かったかな？」

少女の中の1人（本当は少女ではなく少年である）、和久津智はそう一人ごちると、いつもの日常を過ごす為に今日もその溜まり場へと足を運んでいた。

大体の場合、彼が来る頃には、るいや茜子といった面々が先にこの場所へ来ていることが多いのだが、流石に昼時のこの時間にはまだ誰もいない可能性が高い。

（じゃあ、僕が一番乗りかな？）

智がそんな風に思いながら屋上の扉を開くと、その予想は呆気なく崩された。

「あれ？誰がいる……？」

そこには、るいや茜子ではなく、1人の見知らぬ少年が立っていた。こちらに背を向け、フェンス越しに街を見下ろしている。

この場所に自分たち以外の誰かがやって来ることで自分が珍しい、というか今までになかったことなので、智は少々戸惑っていた。

自分たちも勝手にこのビルを使わせて貰っている身ではあるのだが、やはり滅多に人が寄らないこのビルで仲間以外の人間と出会い、智は少し緊張していた。

少年は背後に人の気配を感じたのか、振り返り視線を智の方へと向けた。

二人の目が合う。

「あ、こ、こんにちは」

自分でも分かるくらいにぎこちない不自然な挨拶。

智は思わず苦笑してしまう。

それから智は少年の顔を見た。

少年の顔は中性的な顔立ちで、美少年という言葉がぴったりと当てはまるくらいに整っている。  
同性である自分が思わず見惚れてしまいそうになる程である。  
恐らく同年代なのだろうが、その好奇に満ちた瞳は何処か小さい子供の様な幼さを感じさせた。

少年もまた同じように智の顔をじっと見ている。  
暫くそうしていると、突然笑顔を浮かべた。

「こんにちは、お姉ちゃん」

その言葉遣い、話し方は見た目よりも幼く感じられ、声も何処か声変わりしたての不安定な感じが残っている。

少年は一步步智へと近付いて来た。

やや内股気味に歩くのが、整った外見と比べて不格好に見える。

智の近くまで来ると、少年は体をくの字に曲げた。

「ごめんなさい。勝手に入って来ちゃって」

「えっ?」

少年の口から出たのは謝罪の言葉だった。

智は返答に困る。

自分は別にこのビルの所有者でも何でもない。

寧ろ、自分たちが不法侵入者であり、こちらこそ謝らなければならない立場である。

智はばつが悪くなって、苦笑いで答えた。

「あ、いや、こっちも勝手にここ使ってるし、お互い様、かな? あはは……」

「そっかー!」

少年は体を起こすと、再びにつこりと笑って見せた。  
あどけない無邪気な笑み。

本当に子供のような純粋な笑顔だった。

その愛らしさは智の母性本能をいたく攪る。

こんな弟がいたらいいなあと思は頭の片隅で思った。

その時、後ろの方で扉が開く音がした。

同時に元氣一杯の聲が耳に入ってくる。

「オーツス智ちゃん！……と誰だ？」

「おー！見ない顔であります！」

振り返るまでもなく、皆元ると鳴滝こよりであった。

2人とも智の目の前にいる少年に注目する。

「誰誰ー？智ちゃんの知ってる子？」

「いや……知らない子」

そう言えば彼のことは何も知らない。

そんな当たり前のことさえ、智は忘れていた。

「君は……」

「ねえ」

智が訊ねようとするのを遮って、少年が口を開く。

少年は先程までの笑顔ではなく、幾分か真面目な顔つきになっていた。  
た。

少年の急な変化に智が戸惑っていると、彼は口を開いた。

「お姉ちゃんたち、気を付けてね」

「え？」

「お姉ちゃんたちを狙ってる悪い奴らがいるんだ」

「悪い……奴？」

「でも、安心して。僕はお姉ちゃんたちの味方だから」

「それってどういう……」

智が問い質そうとすると、少年はまたあの無邪気な笑みを見せる。だが、智にはその笑顔が今は何処となく得体の知れない恐ろしいなものに見えていた。

そんな智を後目に、少年は目の前で指をパチリと鳴らしてみせた。次の瞬間、少年は智たちの目の前から消えていた。

「……！！消えた！？」

智は突然の出来事に驚きを隠せず面食らってしまう。

それは智の後ろで一部始終を見ていたるところよりも同様だった。

「え？え？どゆこと？」

「き、消えちゃいましたよ！？み、ミステリーですよ！！」

騒ぐ2人を余所に、智は努めて冷静に目の前の出来事に対する1つの可能性を思い浮かべていた。

（まさか……呪いなのか？）

人が一瞬で目の前から消える。

そんなこと普通には有り得ない。

となれば、普通ではない力が働いたと考えるのが自然である。

そして、その普通ではない力が有り難くないことに身近に存在する。

それは呪い。

(まさか、彼も僕らと同じ……?)

あの少年の放った言葉。

(僕らを狙う悪い奴……)

智の脳裏には伊央輝の姿が浮かんでいた。

かつて、花鶏の大事にしていた本を巡り、パルクールレースで競った相手。

彼女自身はそこまで悪い人間ではないと智は思っているが、その後となると別である。

彼女は得体の知れない連中とつるんでいる様子であった。

それが彼女の意思なのか、従わされているのかは分からないが、ろくな連中ではないというのは分かる。

悪い奴とはその連中のことなのだろうか。

「……」

智は胸の奥底に何とも言い難い不安を覚えた。

それはいずれこの日常を粉々に破壊してしまうような……そんな予感めいたものを感じさせる。

智は自分だけに聞こえる声でぼつりと呟いた。

「央輝……君は違うよね？」

「あ、ああ……」

誰も足を踏み入れない路地裏にて、ヤクザ風の男が血まみれで壁に持たれかかっていた。

体中のあちこちを刺されているようで、出血が酷い。

このままならば、間違い無く失血死してしまうであろう。

「く、クソ！一体何だつてこんな……！」

男は悪態を吐く。

「へー、まだ死んでいなかったんだ」

「……！」

その時、この場に相応しくない無邪気な少年の声が男の耳へ聞こえてきた。

男が声のした方へ視線を向けると、黒い服を着た少年がこちらへつかつかと歩いてくるのが見える。

「うわあああああ……！」

男は絶叫とともに拳銃を取り出して構えた。

しかし、少年が臆することなく指をパチリと鳴らすと、それは何時の間にか手の中から消え、少年の手元に移動していた。

「ば、化け物がっ……！」

男が吐き捨てるように言うと、少年は微笑み、そしてすぐに不快そうな表情に変わった。

「うるせー、馬鹿」

そう吐き捨てると、再び指をパチリと鳴らす。

次の瞬間、男は血だまりの中で息絶え、少年の姿は消えていた。暫くすると、その場にコート姿の長身の男がやって来た。

コート姿の男は死体と化した男を見て舌打ちする。

「ったく、あのガキは……。後片付けをする方の身にもなって欲しいよなあ」

そう愚痴りながら、コート姿の男は首で合図をした。

すると、一瞬の内に死体と血痕は消え去り、まるでそこでは何も起きなかったかのように綺麗になっていた。

コート姿の男はそれを確認すると、踵を返してその場を後にした。

(……全く、これだからガキは困る。SPECがSPECだけに調子に乗ってやがるな。まあ、いい。今の内に調子に乗っておけばいいさ。何れ、お前は俺に従うことになる。お前の意思とは関係なく、な)

コート姿の男はニヤリと笑った。

「なあ、そうだろ？ニノマエ二十一？ジユウイチ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8051p/>

---

SPEC ~ 警視庁公安部公安第五課 未詳事件特別対策係事件簿 ~ 呪われし痣

2011年10月11日06時57分発行